
椿の契約

柚木夏莉(花散里)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椿の契約

【Zコード】

Z7820Y

【作者名】

柚木夏莉（花散里）

【あらすじ】

人間のリクオは妖怪の許婚と呼ばれていた。

許婚と呼ばれる人間は、十三歳になると、妖怪の生贊にされるという

夜昼の時代劇「メ代イ」です。オールキャラ出演。

他サイトで連載していたものを投稿しました。

妖怪（前書き）

B「要素を含みますので、『注意ください』。

妖怪

妖怪の許婚者と呼ばれる人間がいる。

山あいの小さな村に伝わる風習だが、何故かこの村には時折生まれた赤子に妖怪から名前が贈られ、名を贈った妖怪の許婚者と呼ばれる風習があった。

秋の空に美しく光る銀のすきの穂波を見つめるリクオもその一人だった。生まれてすぐの頃に妖怪から名を贈られ、以来そう呼ばれてきた。

とうに親はなく、記憶の中にすら家族の姿がないリクオを村のみんなが育ててくれたのは、自分が妖怪の許婚者だからだと知っていた。許婚者　といえば聞こえはいいが、要は体のいい生贊なのだろう。どういう基準で選ばれるのかは知らないが、どちらにせよ自分から逃れることはできなかつた。名を贈られた時はまだ這うこともできない赤子だったし、親を亡くした時もまだやつと立つて走れるようになつたばかりの頃だつたのだ。生きていく為に、その名前を受け入れるしかなかつた。

どんな妖怪なのだろう？

リクオは銀のすきを一本手にとつた。

明日でリクオは十三歳になる。十三歳は妖怪の成人年齢　その日に妖怪達がやってきて自分を名付けた相手のところに連れて行くといつ。

「頭からがりがりかじられるのは嫌だな。でも生きながら内臓を引き出して食べているのを見せられるのも……」

指や足を一本ずつ折つて食べていく変態だったりむしよつ。いや生き血を全部啜るとか……

「あーだめだ！ 黙目だー！」

トリクオはその茶色い髪を引っ搔き回した。薄い陽の光に映える茶水晶の瞳が溜め息をつきながら下を見つめる。

易々と喰われてやる気はないけれどね……

と微かに笑つたところで、聞き慣れた声がした。

「リクオー」

「苔」

トリクオは走つてきた同じ年の少女を抱きしめた。

「リクオ、明日行っちゃうのね。わらわすじく淋しいの。一人残されて怖い……今まではずつとリクオが一緒だったのに」

苔の本当の名は、「狐毛」という。彼女も同じ妖怪の許婚者だが、その名を嫌つた両親がせめてと漢字だけは普段使うのを違うものにしたのだ。

一月後に十三歳を迎える名家の彼女もやはりその名に由来している。

「大丈夫！ 僕は死んだりなんかしないよ。それに生きていたら、いつか必ず苔のことを助けてあげるから！」

「 本当？ リクオ死なない？」

私も殺されない？

そう瞳で訴えてくる彼女に力強く頷いた。

「うん！ 大丈夫だよ！ 僕はそう簡単には殺されないって」

とリクオは笑うと、苔の髪から簪を一本抜いた。

「 これ、苔のこと忘れないようにもらっておいてもいいかな？」

「え……？」

「う、うん。でも思い出としてよー。」

「 ありがとう」

リクオはゆっくりと笑った。別に彼女に恋をしているわけではなかったが、一番好きな人間はと問われれば間違いなく彼女の名をあげるだろう。

形見なんて殊勝な感情ではないけれどね……

と薄く笑つた。

「あー、もう少しー、ゆうひちゃんが呼んでたのよ。それで来たのだ
つたわ」

「ゆうひちゃんが？」

リクオは身を寄せてこる陰陽師のところの娘の名前をあげた。

「うんー、すうじく探してたわ」

「やうか。じゃあ戻るつか」

茹と二人手を繋いで秋の葉の生い茂る道を帰つて行く。この世で一番大切な人間はこの一人だけーとリクオは繋いだ手の温もりを味わつた。

夕暮れが近づく中、ゆうひは家の前の石段で座り込んでいた。相当探し回つたらしく表情がくたびれている。

「ゆうひちゃんー！」

呼びかけると、蛙が跳ねるよつよつと飛び上がった。

「よかつたーリクオ君ー、探しとつたんやでー！」

本来京生まれのゆうひからは京言葉が抜けない。

「じつじたの？ ゆうひちゃん」

そう不思議そろに記くリクオにゆうひは綺麗な橙色の布で作った袋を

押しつけてきた。

「京の兄ちゃんに頼んで作つてもうつた。御守りや」

「えー？」

とリクオは不思議そうとした。

「秀元の話ではひどいことはされん 飽きられない限り大切にされて殺される」ともないやうといふ話だけど、やっぱり不安や。もしリクオ君がどうしても逃げ出したなつたなら使って。うまく使えるば、逃げる間が稼げる筈や」

「秀元つて……お父さんを」

「あんなん義理の父や。つちの本当のおとんは秀元の兄や。早よつ死んだから兄ちゃんと一緒に引き取られたんや」

と彼女は悲い顔をした。

自分と彼女は境遇が似ている。

とリクオは思った。もちろん彼女は叔父があり、兄も生きているから天涯孤独というわけではないが。

「ありがと。ござりこの時は使つよ」

リクオはその袋をぎゅっと抱きしめた。

「うん、使い方はな」

必死で説明してくれるゆらが可愛く思える。

「 もつと、三人でいたかったな……」

暖かな妹のよつた音と親友のゆら、それはなんと優しい空間だったるつ。

「リクオ君」「

ゆらは言葉をとめた。そして袋を持った手をぎゅっと握った。

「『めんな……まだうちに力が足りんから。やけに生き延びて。そしたらうちも必死で修行して力をつけるさかい』

「 うん」

「リクオ君に名前を贈つた妖怪は秀元の知り合いらしい。悪い奴やない といつた。だから、きっと、大丈夫やと思つ」

「ありがとう」

リクオは親友の手をそつと握り返した。

「 おいーじじー！ 僕に人間を娶れとはどじつことだー!?」

東の大妖怪任侠一家の若頭、奴良リクオは廊下を足音荒く歩き、襖を開いた開口一番そう叫んでいた。

「うぬせこのひ。そんなに叫ばんでもまだ耳は遠くなつとらんで」

「聞こえるよう叫んでいるんじやねえ。突然じうこいつだと訳していいんだー？」

「前から言つていたじゃろ？ お前の名を贈つた人間がいると」

「それがどうしたー？」

「その子が明日で十三になるんじや。つまり成人じや。だからもう娶らせてよかるうと思つての」

「なんで名前を贈つたら俺が人間を娶ることになるんだよー？」

「なんじや？ お前まだしらなんだのか？」

総大将の祖父はにやりと笑つた。

「あの村には時折契つた妖しの妖力を増すことができる人間が生まれる。だから妖しは昔からあの村を見張つて、生まれたような名前を贈つて所有権を主張してきたのよ。お前の祖母おようも母の若菜もあるの村の出身じや」

「なー？ 聞いてねーぞー！ そんなことー！」

「皆がとつぐに耳に入れるとと思つとつたわい。とにかくお前と年も似合いだと思つたから贈つておいた。気にいりや寿命を半分やって嫁にすればええ。その分妖力が下がるが、何度も契ればすぐに取り戻せる。嫁にせんでも、情人にして生きている間中妖力を増幅することもできる。じうしても気に入らなんだら、一夜妻で里に帰せる

「何勝手なこと言つてるんだよ！ 本人にしたら生贊と大差ないじやねえか！？」

「あの村は東の奴良組、西の京都、南西の四国といつ妖怪の大勢力に囲まれながら、そういう人間を出すことで妖怪の襲撃から身を護ってきたんじゃ。勝手なのはお互い様よ」

総大将はキセルを灰盆にかんと押しつけた。

「とにかく、明日はめでたいお前の初娶りじゃ。秀元の話だとかい子らしい。せいぜい嫌われんようにしろよー」

「待て！ ジジイ！！」

しかし孫の声などどこ吹く風で、総大将はひょいひょいと部屋を飛びだしていつてしまっていた。

翌日、人間のリクオは朝から見たことのないご馳走に囲まれていた。

秀元の家に村中の人間が集まり、朝から鯛だ酒だとまるで祝言のような雰囲気だ。

その傍らで、リクオは別の部屋に連れて行かれると、着慣れた着物を脱がされ、真っ白な着物を着せられた。よく見れば白地に白糸で鶴や松が刺繡されており、それが梅や竹と共に裾まで施されてい

る。

もしもこれが裾が長く、後綿帽子でも被せられれば白無垢の花嫁衣装に見えたことだろう。

帯は細帯で、それも完全な白だった。

まるで死に装束だ。

着ながら、リクオは小さく呟いた。

夕刻の逢魔ヶ時、妖怪たちは驅車と共にやつてくるらしい。みんなが派手にやつているのは、もうじき対面しなければならない恐怖を紛らわすためなのだろう。

リクオの仕度が整つた頃、部屋に秀元がやつてきた。

優秀な陰陽師で、彼が来てからはなんとかこの村を手に入れようと乱暴する妖怪が激減した。大勢力の妖怪とは許婚者を送ることで不可侵条約を交わしているが、そうでない小勢力つまり雑魚もいる。それらを今まで大勢力の妖怪に泣きついて鎮圧してもらっていたのが、彼一人で全て片付けるようになつたのだ。

当然村人からは絶大な尊敬を集めている。

その彼が部屋を訪ねてきてリクオを見るなり、

「なんや花嫁さんみたいやなあ

と微かに微笑んだ。

「いつせこ」のまま嫁さんにしていぐらいやで

「あなた男でしょう！」

トリクオは噛みついた。

「まあまあリクオ君、気が高ぶるんは仕方ないけど落ち着いて聞いてや

と優しく宥めた。

「奴良ちゃん リクオ君が行く奴良組は東の大妖怪任侠一家や。正直、当主は人間の肝を喰らう趣味などない。ので安心してや。気に入られれば一生大切にしてくれるやうしき、気に入らなんだら一晩で帰してもらえる筈や。どっちにしても悪い方には転ばん。肩の力抜いて、ちょっと間だけ我慢しとり」

「 それは……やはり一晩は用があるといつことですよね。何をされるんですか？」

「大丈夫！ 生き血啜つたり、手足バラバラにして喰われる」とはありえへん！ ちょっと目を閉じてたらすぐに終わる」

朗らかに言い切ると、秀元は

「大丈夫、別嬪さんやから」

とからから笑つて出て行つてしまつた。

後にはリクオが一人部屋に残された。

秋の風が優しく室内に吹き込んでくる。空は高く澄み、優しい秋の日差しがそこからこぼれるよつとせしんでくる。

遠くで大人達の酒盛りする声と、高い百舌の鳴き声がした。

庭によく見ると白い椿の花が蕾をつけている。

ふとそれを手にとつてみたくなり、リクオは縁側から外に降りた。そして一三部屋離れたところの前にある椿に近づくと、そつと手を伸ばした。

「いよいよあの子も妖怪の慰み者か」

手が椿に触れる前で止まつたのは、広間から響いてきたそんな大人達の声だった。

「契つた妖怪の力を増幅するなど疎ましい能力じゃ」

「あの家はこれで一人田じやけ、血筋かもしれんのう」

「だが今度は男じや。前はそのまま嫁になつたからよかつたようなものの、男では飽きれば里に帰されてくるじやる」

「くわばらくわばらくわばらくわばらくわばら。妖怪に触れられたそんなおぞましい子堪忍じ
や
や」

「じゃが十三では放り出すわけにもいかんて」

「できるだけ長くかわいがつてもいいのが最良だの」　村にとつて

「ああ、そんな子帰つていらっしゃても迷惑なだけじゃからのう」

ぱきりとリクオは椿の枝を握り折つていた。

今聞いた言葉が頭の中ぐるぐると回つてゐる。

慰み者！？　妖怪の！？

凄まじい田つたで白い椿を見つめる。

妖怪の力をあげるためだけに？

ぶちりと音がして、椿の枝を力任せに引きちぎつていた。

その日の夕刻、逢魔ヶ時の闇の中を一台の豪勢な車が空を走つてきた。牛車につけられる御簾を下げた車で、側に一人の鴉天狗がついている。

「これはこれは、よつこお越し下さいました。わたくし、中へ。祝いの酒と肴を用意します」

村の長が出てきて、震えながら頭を下げるが、鴉天狗は言った。

「結構。儂らは若の許婚者を受け取りに参つただけ　お引き渡し願おう」

みんながその言葉と異形の姿に体を小さくし、必死で頭を下げている中、秀元が白装束のリクオを連れてやってきた。

「これがリクオや。大きゅうかわゆうなつたやん」

自分の傍らに立つ白い椿の薔薇を髪に挿したリクオの背中を押した。

「おお……それは若のお名前。確かに許婚者殿を受け取った」

リクオは背を押されるままに、一步前に出ると、秀元から鴉天狗の手へと引き渡された。

彼らは主君への捧げ物を恭しく扱うと、連れてきた驥車に乗せた。

御簾が下ろされ、引く牛も馬もないのに車はゆっくりと軋み、「がたん」とんと動き出す。それが突然斜めになつたかと思つと、そよいだ御簾の間から宵の月が見え、車は空へと飛び立つた。

何が見えるわけでもないのに一度だけ窓からリクオは村を振り返つた。

茹……

きっと泣いてくれている彼女の顔が一瞬思い出された。

空の旅は一刻余りだった。やがてぎしそじと車が降下を始めるといこかの屋敷に入る気配がした。

そして車が玄関につけられ、鴉天狗の声に従い降りる。

田の前には、長い銀の髪を後ろに靡かせた金の瞳の妖怪が立ち、やつてきた子供をじっと見つめていた。

ほかにも首の浮いた妖怪や、納豆小僧、真っ白な髪の少女の妖怪もいる。九十九神らも後ろから若の許婚者を一目見ようとわらわらと集まっていた。

よかつた。俺より小さい！……それに予想よりはかわいい。

妖怪のリクオは無言で見つめながら、ほつと胸をなで下ろしていた。

正直どんな人間が来るのが不安だったのだ。もし自分より背が高く、太っている大女だったら、どうしようかと思っていた。だけど田の前にいる子供は年よりも小柄で、大きな茶水晶の瞳が爽やかだ。

「お前さんが『リクオ』かい？」

祖父も横からその姿を覗き込んで、これなら上々といった感じで尋ねた。

「はい。僕がリクオです」

人間のリクオは臆することなく答えた。

「そりかそりか！ 別嬪さんに育つた！ うん、僕？」

「僕……」

と妖怪のリクオも呟いた。

「男じゃねえか！？　じつこいつとだー？　じじいーー！」

「おかしこのつー生まれた時の知らせでは確かに女の子じゃったん
じやが……」

「俺に男を抱けってか！？」

「ハハハ……」

と祖父は扇子を口元に持ちながら、低く呻いた。

そしてしばらへ考えていたが、やがてぽんと扇子を手で打つた。

「よしー、臨機応変に対応！　嫁にするのでなければ何も問題はない
しー、このまま続行ーー！　側近達、ひとつ説明してやれ」

「待てーーー、へんじじーーー！」

「醜女よりかわいい少年の方がマシじゃと思ふ。とにかくみんな若
の初娶りじや。宴会、じやーーーーー！」

うわーと妖怪たちが歎声をあげ、

「若ーー　おめでとうござりますーーーー！」

「おかげで初娶りおめでとうござりますーーーー！」

「初娶りおめでとうござりますーーーー！」

と次々押しかけ祝辞を述べていった。

その中で、人間のリクオに長い黒髪の女の妖怪が近づくと、

「ではリクオ様は、こちらへ。」案内します」

と自分より随分小さな姿を別室へと導いて行つた。

何が問題なしだ！

夜着で廊下を歩きながら、妖怪のリクオは咳いていた。

あの後、側近達からやり方を教えられたが、正直自信がない。

相手は男で、自分は初めてなのだ。しかし妖力があがつていなければ、何もなかつたとすぐにばれるだろう。

とにかく今夜をさつとすませて、明日帰つてもらおつ……

妖怪の側に長くいたい人間などいないだろうから、これが最高の解決だろうと妖怪のリクオは思った。

毛倡妓に教えられていた部屋の襖を開け、中に入る。

中では淡い行灯の光の中、白い襦の横で人間のリクオが白い着物に白い椿の蕾を髪に挿して身を固くして座つていた。

考えてみれば、こいつが一番の被害者なんだよな……

ふとその前に立ちながら考えた。

村の生贊にされ、望んでもいないましてや妖怪に抱かれることになるなんて……

できるだけ優しくしてやるうと、そつとその身に手を伸ばした。

その途端指の先に焼けるような痛みが走った。

見れば皮一枚が切れて浅く血が滲んでいる。

「僕に触るな！」

顔を上げた人間のリクオは金色に光を受けて輝く懷剣を手にしながら、妖怪のリクオを憎悪のこもった瞳で見つめていた。

「妖怪の慰み者にされるぐらうなら」

人間のリクオは懷剣をぎらりと輝かせた。

「お前を殺してやる！」

戦い開始

二人を照らす行灯の光が闇の中でゆらりと揺れた。それに伴い、向かい合い立つ二人の影も大きく揺れる。

「俺を殺すだと？」

妖怪のリクオは指先に薄く滲んだ血を舌で舐めとった。

「面白え。やれるもんならやってみろ」

にやりと笑うと袴々切丸を取り出した。

「この退魔刀ではもちろん人間のリクオは切れない。だが殺さず適度に打撲を与えることはできる」と妖怪のリクオはすらりと刀を抜いた。

二つの刀が金色の光を放つ中、先に動いたリクオは妖怪の方だった。

大きく踏み込み、その小さな体めがけて刀を振り下ろす。

しかしそれは頭の上に構えた懐剣で鋭い音と共に受け止められた。そして横に流される。

長い刃が横にそれた一瞬の隙に踏み込むと、人間のリクオは妖怪のリクオの脇腹めがけて懐剣を抉るように突き出した。

「つう……！」

それを構え直す暇のなかつた妖怪のリクオは刀の握りの部分で受け止めると、突きを横にそらした。

突進をかわされ、無防備にさらけ出すことになつた背中にむかつて構え直した祢々切丸が振り下ろされる。

とつた！

と思つた。しかし背中を向けたまま、懐剣だけが振り戻されその太刀を受けた。

正直この姿勢で受け止められるとは思わなかつた。

「やるじゃねえか」

妖怪のリクオはにやりと笑つた。

人間でここまでやれる相手は初めてだつた。

腕は俺と互角……ぐらいか？

「自分が妖怪に差し出されると知つた日から毎日鍛えてきたんだ。簡単にやられはしない！」

と人間のリクオは言つた。

「いつ面白え。

妖怪のリクオは一度身を離すと、祢々切丸をぐんと突きの形に変え

て飛び込んだ。

渾身の突きだ。受け止めようとも懐剣ならひびが入るはずだった。しかし人間のリクオは受け止めず、その小柄な体を低くすることでかわした。そして上にある妖怪の首めがけて懐剣を突き立てようとする。

それを左手でその小さな体」と吹き飛ばし、妖怪のリクオはかわした。

吹き飛ばした体めがけて祢々切丸を首もとに突き立てる。

そしてその体がこれ以上暴れないようにその上に跨つた。

「俺の勝ちだな」

妖怪のリクオは誇り、首もとの畳に突き立てた祢々切丸から手を離した。

「それじゃあ、大人しく」

「大人しく……何をするんだった？」

と思い出したところで思わず一瞬体が固まつた。

その刹那、その金の刃に鋭く削られた椿の枝が一ミリの隙間で当てられた。

「大人しく　何だつて？」

祢々切丸はすぐには抜けない。抜く間に田を抉り取られるだらう。

「……わかった。今夜は何もしない」

冷や汗を流しながら、そう敗北宣言をするしかなかつた。

それでも薔の椿の枝をのけないリクオに、妖怪の方は証明するよう体を離すと、敷かれた白い襦に行き、一人ごろりと寝た。

「何にもしねえから、お前も寝ろ。今日はくたびれただらう

そう言づと背中を向けてしまつた。

暫く部屋の端から動かなかつた人間のリクオだが、やがて掛け布団だけ持つて部屋の端に行くと丸くなつてしまつた。

本当はとても疲れていたのだろう。暫くすると静かな囁くような寝息が妖怪のリクオの耳を打つた。

翌日、朝部屋から出できた若を確かめようとみんながわらわらと朝食に向かう若の姿を見に来た。

しかしその妖力があがつた気配は一向にない。

「これは……

みんなが一瞬で悟つた。

失敗だ！

「いやあー失敗かあ」

「若の姿ならおとせない相手なんていそつこないのになあ」

「初めてで緊張したとか？」

勝手なことを言い合う妖怪達に、人間のリクオはそしらぬ顔で「飯を食べてこる。しかし妖怪のリクオの方はそうはいかない。

なんだが……男としての誇りにかけてひけなくなってきた……！」

「一日田の夜、みんなの大支援を受けて向かった禰で、とにかく口説いてみることにした。

「なあ、お前の本意じやなかろうが、俺はお前が相手でよかつたと思つたぜ？ すじくかわいいし、綺麗な田をしている」

「へえー妖怪つて男女どっちでも平氣なんだ。みんな両刀？」

「いやいや、俺はほんく普通に女がよくて……」

「なら僕にそんな風に思つわけないじゃん」

「いフ……」

三日田、みんなが必死に応援してくれるのが悲しくて、強引に出でみるとこにする。

相手は人間だ！ 力なら妖怪の俺の方が上な筈……！

無理矢理体を抱き上げ、襦に連れて行くと、全身で体を押さえ、着物の合わせに手をかけた。

その時、自由になつた腕が、一瞬のうちに首に回されたと思つと、延髄にぴたりと簪を押しつけられた。

「続ける？」

「……今夜は遠慮します」

四日目、みんながそつと遠くから見守る中、部屋に入ると、今夜こそ決着をつけようと墨を使ってみる。

姿が見えなければ、簪で狙つことも逃げることもできない筈……

事実、見えない相手に襦に押し倒され、着物をくつろがれたりクオはひどくなめかしくみえた。

今夜は行ける！

そう思い、胸に口づけた時、襦の下の端から隠していた紐が取り出され素早く首にまかれた。

口づけで頭の位置がしれたのだ。

「やめてくれねえかな？ 洒落にならねえ」

ぎりぎりと引かれる紐に姿を現すと、妖怪のリクオは人間のリクオ

を冷や汗で見つめた。

「やめる? どうが?」

「……すみません。謝ります」

五日目、物陰から「そ」そ囁いている妖怪達を後ろ日に部屋に入ると、説得を試みる。

「なあ、だから一夜だけでいいんだって。そしたら元の村に帰してやるから」

「ふうん……やっぱり一夜の慰み者なんだ」

「いやいや、お前が構わないんなら、俺はお前を恋人として一生大切にするぜ?」

「それって要するに情人でしょう? つまりお妾だよね?」

「だつて嫁にはできねーし……でも一生大切にするから…」

「うそうそ。最初のが本音なくせに。体だけ得たら早く厄介払いしたいものね」

……挫折。

柔らかな秋の日差しが青い空を照らす風景が見える部屋で、総大将はからからと笑った。

「見事に五連敗か！」

「笑い」とじやねえ、じじー」

孫はその前でぶすつとした顔で酒を飲んでいた。

「いやいや、しかしながら強者じゃの。お前の許婚者は…」

扇子を広げ、楽しげに笑う姿に妖怪のリクオは思わず毒づいた。

「じじいだらうがー、あんな妖怪以上に凶悪な奴を許婚者にしたのは」

「このなると女でなかつたのが実に惜しい。女なら是非お前の嫁にと言いたいところじゃ」

「冗談じゃない！ 命がいくつあっても足りねーよー。」

「物騒なものほど魅力的なもんぢやぞ？ お前、まだ思考がお子様じやな」

「そんな魅力わからたくないわーーー。」

その時、とたとたと廊下を歩く音があると、からつと半開きの障子が開かれた。

「おじいちゃん。呼んだー？」

見ると人間のリクオがにっこりと顔を覗かせてくる。妖怪のリクオはその見たことのない表情と言葉に固まつた。

おじいちゃん？

「おお、リクオか。昨日の続きの碁をしよう。今度は負けんぞ」

「うん。でも僕も負けないよ、おじいちゃんー。」

「おい、じじい……」

妖怪のリクオは田の前で展開されている光景に思わず叫んだ。

「何おじいちゃんなんて呼ばせてんだよー！？」

「うるさいのう。わしはリクオの名付け親で、しかも許婚者の祖父だぞ？　おじいちゃんと呼ばせてもかまわんじやろが」

「くわじじーのくせに何を偉そつにー。」

「こんな反抗期の孫より素直な許婚者の方が孫としてかわいいて。本当に嫁にほしかったのむ」

飴食べるかと人間のリクオに菓子入れを差し出している。

素直にそれを受け取る人間のリクオを絶句して見つめていた。

「のくわじじーと一重人格者が……！」

そこに妖怪のリクオの母若菜がやつてきた。

「リクオー、ここにいるの？」

「お袋」

と妖怪のリクオは障子の方を振り返った。

「ああ、リクオじゃなくて、もう一人のリクオの方……ってややこしいわね」

「ある妖怪は僕を昼のリクオって呼ぶよ！ 人間は活動時間が昼間だからって……」

「ああ、それいいわね」

にこりと若菜は手を打った。

「じゃあ今度から昼のリクオと息子の方は夜のリクオって呼び分けましょ？」

「やううじやな。長期戦になりそつじやし、その方がわかりやすいじやう！」

祖父もからからと笑った。

「じゃあ、昼のリクオ。いつまでもその白い着物じゃなんだと思つて、新しいのを縫つてみたの。ちょっと袖を通してみてくれる？」

「え……僕に新しい着物？」

と昼は照ながら戸惑つている。

「そう！ 夜は派手なのを好むけれど、あなたのはちょっと落ち着いた色のかわいいので作ってみたの！ 着てみて」

「でも……いいの？ 僕なんかに……」

「もちろんよ！ それから私のことはお母さんと呼んでね！」

「お母さん……」

薄く頬を染めながら唇は呟いた。

「おい？ オ袋……？」

呆然としている夜に若菜は昼のリクオの肩に手を置いて、じゃーんといった感じで打ち明けた。

「実は昼のリクオは私の双子の妹の子なの！ だからあなた達は従兄弟同士！ 妹亡き今、一番近い親戚の私が親代わりになるのは当たり前でしょう？」

「聞いてないぞ！ そんなこと……！」

「私もこの子から聞くまで知らなかつたんですもの。あの子が子供を産んだことも死んだことも……」

「そつ若菜はうつすらと田に涙を溜めた。

「あの子は、どんな風にして死んだの？」

「隣村の法要に夫婦で出かけて……帰り道で土砂崩れに巻き込まれ

て

「そつ……幼い子を残してさぞ心残りだつたでしょ」うね……両親、あなたの祖父母は？」

「母が婿をとつて家を継いですぐに他界して……」

「そつ……私が妖怪の許婚者で、ただでさえ白い目で見られていた家だったから幼いあなたには辛かつたでしょうね。でもこれからは私がお母さんよ！　あの子のしたかつた分してあげる！」

と暁のリクオの手を引いて笑顔で連れて行つてしまつた。

その途中ですれ違つた青田坊や納豆小僧に暁は陽気に挨拶をしていく。

俺の知らないいつの間にあんなに妖怪や家族に馴染んでんだ……

ぶすつと夜は面白くなく呟いた。

祖父の部屋を出て暫く廊下を歩くと、廊下の先で何やら妖怪達が集まつているのが目にに入った。

「俺は一週間後に一分銀だ」

「じゃあ僕は五日後に一分銀」

「では拙僧は三週間後に……」

「みんな何をやっているんだ?」

夜は集まっている妖怪達に声をかけた。

「わ、若……」

驚く妖怪達の中で首無がにっこりと頭だけで振り返った。

「若もやりますか? 若当へ」

「何だ? その若当へって

近づくとふわふわと浮く笑顔に尋ねた。

「若がいつ許婚者殿をおとせるか、みんなで賭けているんですよ。ちなみに私は半年後に一分です」

「お前! 遠回しにおとせなって思つていいな! ?

「いえいえ、報われない努力も続ければ実を結ぶと思つています

「報われないとか断定するなー! 」

「ちなみに総大将は一月後。若菜様は一ヶ月後です」

「みんな俺で遊んでるー。そつ思つていいといふことだなー! ?

その日の夕方、夜のリクオは初娶りの祝い酒を持ってやってきた
義兄弟の鳩と一人で酌み交わしていた。

「さつはつまつ！ そういうことか！」

鳩は酔いながら豪快に笑った。

「薬鳩堂に来た本家の妖怪からどうもお前の初娶りがうまくいってないときいたんで、これはやっぱり相手が男だから食指が動かねーんじやないかと思つて女にする薬作つてきたんだが、それなら媚薬の方がよかつたなあ」

と横に置いた瓢箪を手に持つた。

「媚薬……」

「おう。どんな貞淑な女でも泣いて求めてくる強烈なやつ作つてやるぜ」

「いや……やすがにそこまでは……」

夜は酒を呑む手を休めて呟いた。

その時、突然後ろから声がした。

「誰に媚薬を盛るつて？」

と匂が酒のおかわりを持って現れた。

「ひ、匂……」

目に見えて夜のリクオの肩が飛び上がった。

「えつー。お前さんが噂の許婚者か。」りや別嬪さんだ！」

「あまり夜に変なこと吹き込まないで下をこよ。被害にあつのは僕なんですから」

お前がいつ被害にあつた！？

毎日指先を切られたり、首を絞められた夜は心の中で叫んだ。

今回の事態の一一番の被害者は絶対俺だ！

「なに？ お前ら昏と夜つて呼び合つてんの？」

「ええ。同じリクオですから、紛らわしいでしょ？」

「なら、つーちゃんとかりくたんとかでもよかつたんじゃね？」

「……誰かが言い出しそうだから事前に手を打つたんですよ」

発案者は実はお前か！？

思わず夜は昏のリクオを振り返った。しかし昏は平然と徳利の交換をしている。

「あははー！ そりゃあ惜しかった！ 一度本家の若頭をりくたんつて呼んでみたかったぜ」

「僕がりーちゃんなら許します」

嫌だ！ 本家全員にりくたんつて大合囃されるなんて…！

想像しただけで恐ろしい……

じうなると平氣な顔でお酌をして、空の徳利を下げていった昼の機転がありがたい。

その後ろ姿を見送つて、鳩はにやりと笑つた。

「ふうん。あれは確かに手強い」

「わかるか！？」

「相手をよく観察して症状を知るのが俺の生業だ。俺の見立てじゃ超特級だ。これなら二日じゃなく三か月に賭けとけばよかつたぜ」

「 おい、賭けつて……」

「おひ。さつきそこで本家の妖怪に若当てに誘われてな。女体化の薬で二日に賭けたが一分損したぜ」

遂に本家以外にまで広がり始めた……

暗く夜は打ちひしがれた。

鳩が帰つた後も、なんとなく月見をしながら酒を呑んでいた夜だったが、そこにぬるくなつた徳利を熱燗に替えようと昼が新しいのを持ってきた。

「温かいの呑まないと、秋は体が冷えるよ」

その言葉に、

「え、優しいところもあるんだな。」

そう思いながら杯に注いでもらつた。

ぐつと喉を通っていく酒は焼けるように熱くて体を暖める。

「どう？」

匂は尋ねた。

「うん、うまい」

「いいと二人月見も悪くねえな……」

そう夜は静かに自分を見つめる匂を見ながら心で呟いた。

「やっぱり妖怪ここに程度の毒じゃ効かないか」

ぶはっと夜がむせた。

「毒つて！ お前……！？」

「人に媚薬を盛る相談なんかしているからだよ。これで一服盛られる気分がわかつただろ？」

とぬるくなつた徳利を持つて、すたすたと歩いて行つてしまつた。

前言撤回だ！ やはつあいつといふのとくへな田にあわない！

さすかでむう酒を呑む氣分じやなくして、杯を投げ出したまま池に映つた月を見つめていた。

すると毛倡妓がいそごとせりあつてきた。

「若、おわり遅くなつてすみません」

しかし夜は力なく首を振ると、杯を毛倡妓の方に押し返した。

「いい。……当分酒を見る氣もおあそ

す」と毛倡妓は意外なことにへすべつと笑つた。

「あり それよりひざこました」

とぐすくす笑つてゐる。

「最近お酒が過ぎるよつてでしたので、少し控えてもうれないか量の
リクオ様に説得を頼みました。その様子ですと、うまくお話を
いましたのね」

え！？

夜は田を見開いて毛倡妓を見つめた。

「酒をやめるよつて毎に頼んだ？」

「はい。昼様のお蔭でやめられたのではないのですか？」

「いや そうだけど……」

俺の為？

よく考えたら、色々な武器を隠していた風だが、毒まで用意していったとは思いにくい よつな予想外に持つていそうな気もする。

どうちなんだ！？

わからない真相に夜は頭を抱えた。

水面の月がゆるりと揺れた。

その日の夜は結局禰に行かず、一晩月を見て過ごした。

翌日、庭を歩いているとまた妖怪達が集まって何か話している。

「では俺は三日に一分！」

「私は一日に一分！」

「俺は今夜に賭ける！」

また若当てか……

げんなりして、一晩釘を刺しておいた後ろから首無に声をかけた。

「おこ、首無。若当で遊ぶのもいい加減にしど」

「あ、若」

首無はまた頭だけで振り返った。

「違いますよ、これは若当じやあつません」

「？　じゃあなんなんだ？」

夜は尋ねた。

「これはいつ若が我慢できなくなつて匂のリクオ様に媚薬を盛るか
です」

「何だと！？　その話どこのから聞いた？」

「匂のリクオ様から　鳩様と相談してたって」

やられた！

直感的に夜は思った。

「れでもう男の自尊心にかけて媚薬は使えない……

媚薬に頼つて許婚者を抱いたなど、あまりに男として情けない話だ。

そこまでしないと許してもらえなかつたといふのも恥だ。

「まあ、私は使わないに賭けたんですけどね」と首無は明るく笑った。

その声に夜は生まれた時からいる側近を見上げた。

「まあ　余程追い詰められないと若がそんなことをするとは思えないといふか……」

その笑みは大丈夫、ちゃんとわかつてますよという風に見えた。

「　首無」

だからほろりと言葉が洩れた。

「俺はどうしたらいいんだと思う？　あんなに嫌がっているんだ、このまま村に帰してやつた方がいいのか？」

「そうですね……」

と首無は常にはない若の弱気な態度に苦笑をこぼした。

「」自分に置き換えてみてください。もし誰か人間の男があなたの妖力が欲しいので抱かせると言つたら、それに従いますか？」

「その場で殺す」

「でしょうね、それが今の昼のリクオ様とあなたの関係ですよ」

「う……」

夜は言葉に詰まつた。

「愛してるから」と囁つのでなければ、惚れさせなくてはいけません。男としてでも友人としてでもいい。協力を惜しまない そう思わせねければ、体なんて差し出してくれません」

「…………」

「先ずお互いをよく知ることです。少しづつ時間をかけて、ゆっくり話を。そしてお互いの良いところを知っていく。そしたらきっと分かり合えます」

「…………時間かける…………」

「やア。半年ぐらいかかる気持ちでいけば成功する筈です。私の小遣いの為にも」

「お前、最後の本音は隠せ」

と夜はむりと膨れた。

「まあ、冗談はさておき」

首無は笑つた。

「私はあなたが三代目を継ぐ時、の方には是非その側にいてほしい。の方はあなたにない狡猾なしたたかさをお持ちです。それはきっとあなたの背後を守るでしょう」

「首無」

「それにあの方が来られてから、あなたはずつと年相応の表情が増えた。狡猾なあの方の前ではつっぱれないのじゃありませんか？」

「だつていつも先手を打たれて……」

「そういう本音をさらけだせれる方が必要なんです。上に立つ者は」

大丈夫、きっと仲良くなれますよ、と首無は穏やかに笑った。

その夜、虫の声が響く中、夜のリクオは後から部屋に入つてくると、昼の前を素通りして一人禱にじろんと横たわった。

暫くそれを見ていたが、何もして来る気配がないと思つと、昼はいつものように掛け布団だけ持つて部屋の端に移動しようとした。

布団を握るその手を感じ、

「おー」

と夜は声をかけた。

「もう無理矢理はしねえよ。ちゃんと敷き布団で寝な

それは同衾しろと言つてこむことだ。昼の手が止まつた。

「こべら妖怪だつて毎日掛け布団ないと寒いんだよ。お前の同意なしに無理強いはしないから、安心しな」

少しの沈黙が落ちた。

無理か……

今までの行動が行動だ、と夜は思つた。しかし、

「わかった」

と返事が返ると、自分の上にぱさりと掛け布団が落ちてきて、背中ごしに何かが丸まっている気配が伝わってきた。

布団の隙間を通してじんわりと熱が伝わってくる。

その温かさがほんの少し一人の距離を縮めたような気がして夜の心がほのかにぬくもつた。

とにかくよく昼のリクオのことを探り、夜は翌日からじっと昼の行動を見続けた。

昼のリクオはとにかく一つ一つが礼儀正しい。食事をする時もきちんと正座だし、よく見ていろとこ飯粒一つ残さずきれいに食べる。雪女の作った料理は凍つていて、秋の朝の腹にはこたえるだらうと、そんなことおぐびにも出されず、本当におりしゃりに食べている。

慣れている本家の人は、暖かい茶をどばどば喉に流し込んでいるのにだ。

「御馳走様でした」

そう言つと、自分の分の膳は自分で片付けようとする。いや、ほかの食べ終わった妖怪達の分もだ。

「夜はもうこいの？」

と尋ねてこられて夜は内心驚いた。見ていたのに気付かれたかと思ったのだ。

「ああ、終わってるぜ」

平静を装つて答えた。

「ダメだよ？ まだ味噌汁底に残つていいじゃない」

「お前はお袋か？」

残っていると言つてもほんの一口だ。すればすぐになくなるだろう。氷の塊と戦いながらだが。

「今日食べないと明日の分が減るんだよ？」

「それは減らすと書つてゐるな」

まつたく、と言ひながら味噌汁と格闘する若の姿を本家の妖怪全員が暖かく見守つた。

台所の手伝いをしたかと思えば、次は庭で草引きをしていく。

縁側で煙管片手に見つめていると、本当にへんへんとよく動く。働くことがまつたく苦になつてこないよつだ。

「昼夜！ そんなことは私達でやりますからー！」

慌てて下働きの妖怪が走つてきた。

「いいのいいの。僕いつこの好きなんだからー！」

あれは本当に毎晩俺に悪口雜言はいている顔の口かー？

その爽やかな人好きのする笑顔に思わず頭を抱えそうになる。

「リクオ様、どうぞください」

と雪女が言つと、周り一面に霜を降らせた。

「さあ、これで雑草は全部霜焼けを起こして駄目になりますよ」

とヒーリーと笑う笑顔に、畠はお一つと手を叩いている。

「す、いやー、僕もそんな技使いたいな」

お前は言葉で相手を凍らせるから、それ以上余分な冷気はいらん！

思わず頭が痛くなつて溜め息が出た。

そんな夜の様子を本家の妖怪はみんな物陰から見つめていた。

「若　あんなに熱心に見つめたり……」

「そ、うですか。許婚者殿に片想い」

「でも受け入れてもらえず、さりとて無理強いもできず、

「切ないですね……」

よしー、本家は一致団結して若の初恋を応援しよう！

はなはなだしい誤解から奇妙な団結が生まれていた。

田中働くか祖父や妖怪の相手をしていた畠だったが、夜になるとまた台所の手伝いをしみんなが呑む酒やつまみの用意をしていた。

本当によく働くな……

最早夜は呆れていた。

今日一 日見ていて気がついたこと、それはどうやらじつこの腹の底を見たことがあるのは自分だけらしいといつこと。

首無などは気がついているようだが、ほかには見事な猫がぶりだ。これだけ長時間爽やかな愛想のよい姿を見せられると、最早どっちが本性かわからなくなる。

その晩、本家妖怪達の生温い眼差しに見守られながら寝間に入った夜は、脱いだ着物を丁寧に置んでいた。昼を見つめていた。

母、若菜が作った落ち着いた赤茶色の着物を皺を伸ばしながら、肩を合わせ袖を折り畳んでいく。

それは大事な物を扱うようにひどく丁寧な所作だった。

「その着物、気に入つたのか？」

だからなんとなく尋ねた。

「うん、すごく嬉しい」

「普通の着物だろう？」

特に派手な模様が入っているわけでも、高級な生地が使われているわけでもない。普段着用の無地の着物だ。

「だつて僕、僕用の新しい着物つてほとんど作つてもうつたことないから」

「うん？」

思わず聞き返した。

「ほら 僕の親つて早くに死んじゃつたじゃない。だから秀元さんに引き取られる迄は村の縁者の家を転々として育つたんだ。でもどの家も子沢山で、居候は食べせてもうればいい方だつたから」

着物はお古ばかりだつたんだよ、と眞は笑つた。

「秀元さんのところに行つてからも竜一さんのお下がりが多かつたし……それはかまわないんだけど、やつぱり自分用つて嬉しい」

「お前……」

意外と苦労してゐるんだな……

と言いかけてやめた。妖怪の許婚者が白い皿で見られたと母は言つていた。

だとしたら、こいつの苦労は半分以上俺が背負わせたのか……
なんだか、悲しくなつてその小さな体を抱きしめてやりたくなつた。
勿論即殴られるとわかっているからしない。

ひょっとしたら、こいつの体が年よりも小さいのも……

あまり満足に食べせてもうれなかつたのかもしれない。

食べないと明日の『』飯が減るんだよ？

本当にそんな生活だったのかもしれない。

せめてここにいる間ぐらいは苦労かけさせないでここでやりたい

布団の中に入ってきた、ぐるっと向けられた小さな胸中にそつ思
つた。

翌日、爽やかに晴れ渡った青空の下、それは青田坊の一言から始
まった。

「若！ 鍛錬の為、本家内武闘戦をやつましょ！」

「武闘戦！？」

喧嘩好きの妖怪達も思わずびっくりした。

「やつです！ たまには若の勇姿を見せてくださいね！」

「そのままではただの飲兵衛と思われてしまいます！」

その意外の言葉を本家の妖怪達は敏感に感じ取っていた。

ああ……そういえば青が賭けていたのは今夜だったわね……

後一週間は粘つてほしいんだが、いや後三日……と様々な疑惑が本

家のなかを交錯したが、

「やつれしうひよ、若」

とこゝ首無の言葉で決まった。

「牛の歩みも一歩からですよ」

ああ……やつね。こへらかゝりよへても、手の平を返すタイプ
じゃないわ……

となるといつは若の初恋の為自分の賭け金の為、そして田先の楽しみ
の為、本家は一致団結することになったのだ。

やるとなるとお祭り喧嘩大好きの奴良組のことで、盛り上がる盛り
上がる。青じ空の下で、

「いけー！ 青ー！」

「やしよしーーー 黒ーーー」

と白こゝ雲こゝまで届くのではないかとこゝ歓声が響き渡った。

雪女が相手を雪だるまにして動きを封じれば、毛倡妓が黒髪を扇
のように広げて攻撃する。首無が紐で相手を吊り下げる、河童が
水球を投げてくる。納豆小僧が納豆を飛ばし、やせ美が飛んで避け
る。

「よし！ 次は俺の番だなー！」

夜は活き活きとした顔で祢々切丸を持つと黒羽丸の前に立つた。

「若。一手御指南お願い致します」

「おう。お前どがちでやるのは初めてだな」

と一人は向かい合つた。

本家の若頭とその側近の戦いだ。誰もが思わず息を潜めた。

それを縁側に座布団を敷かれて畳は座つて見ていた。それまで夜がいた隣の座布団は今空になつていて、

じつと夜の戦いを見つめる畳の様子をみんな^{ヒヤヒヤ}でひりつと見つめ、

どうか若の良いところを見せられますように――

切実に祈つた。

考えてみれば、闇で話すか酒を飲んでいるか飯を食つていふところしか知らないのでは、ろくでなし街道まつしぐらだ。ここらで軌道修正しておかないと本当に自分の小遣にも若の初恋もやばい。

みんなが望んだ通り、若是さして苦戦することもなく、自在に祢々切丸を振り回すと、実際に活き活きと本家の妖怪達を峰打ちで倒していく。もしくは首もとに刃を突きつけ、敗北宣言をさせる。

雪女は惜しみなく拍手を送つた。

わすがは若！ 素晴らしきです！

「これで暁のリクオ様もきっと……と」の憧れる主の恋の成就を願い、そつと横を見た。

暁のリクオは楽しそうに拍手をしている。「ここに」と笑っているのに、雪女はほっと安堵した。

「おい、暁」

突然夜が声をかけた。

「お前もやらいねえか？」

「僕？」

暁はきょとんとしている。

「若！？ なんてことを！？」

想い人に試合を申し込むなんて完全に想定外の「さき」とだ。だが夜は笑いながら続けた。

「お前、腕は俺と同じくらいだろう？ 一度太刀と太刀で五分の試合をしてみたかったんだ」

「若と同じくらいの腕前！？」

さすがにこの発言には本家はどうよめいた。

縁側から立ち上がり、太刀を側の小妖怪から受け取りながら言つた。

「いいけど……勝つたら何でも一つ言つことをきけとか言わない?」

ぴたりと夜の体の動きが止まつた。鈍い沈黙が続く。

若がその手があつたかと思つてゐる！

みんなが一瞬にして理解した。

「迷つてゐる」

「迷つてますね」

ひそひそと声が囁かれた。

۱۵۷

夜はどうにか口元を動かし、笑みの形にした。

「俺がそんな姑息なこと言うかよ」

「強がつた！」

「強がりましたね……」

「いや、見榮張るしかないでしょう。先手打たれては」

「ノルマニー・ラジオ」

思わず夜が祢々切丸を構えた。

「ならいいんだ」

とそれは爽やかにつこりと昼は笑んだ。

ダメ押しされた……！

本家の誰もがもう言葉にできず、ただ冷や汗を流した。

何故だろ？ あんなに爽やかな笑顔なのに黒く見えるなんて

……

それは妖怪達の一致した思いだったが、それとはおかまいなく目の前では一人のリクオが剣をかまえていた。

太陽の光を浴びて、刃は眩い金色に輝いた。

最初に動いたのは昼の方だった。大上段から袈裟懸けに夜に切りかかる。

本気だ！

本家の妖怪は息をのんだ。

しかしそれを肩に触れる前に祢々切丸で受け止めると、刃の押し合いを暫く交わし、互いに弾いた。

茶色い淡い髪が光を受けて靡いて、地面に体がつくのに一拍遅れ

てふわりと元に戻った。

次に夜がその胴体めがけて打ち込んだ。しかしそれも刀で受け止められる。

夜の金色の瞳がにやりと笑んだ。

「やつぱり勝負はこうでなくちゃな」

今日は得物の有利不利がねえ　　と夜は笑った。

「そんなに余裕がある状態?」

と昼は剣を弾いた。

続けて数度剣戟を交わす。

その動きにつられて、夜の銀の髪が楽しげに眩く輝いた。

「楽しいものを楽しんで何が悪い」

それは妖怪の性なのだろう。しかしその言葉に昼もにやりと笑った。

「ふうん　じゃあ、僕も自己流で楽しむよ」

そう刀を持ち替えると、鋭い突きを繰り出した。

明らかに首を狙ったそれを素早い身のこなしでかわす。かわしさまにその腕めがけて祢々切丸が振り払われた。しかしそれを咄嗟に体を転がすことによつて避ける。

転がつたまま足めがけて太刀を昼は奮つた。

「若！」

思わず雪女が声をあげる。

しかし夜は飛んでかわすと、今度はその太刀をもつ腕を蹴り上げた。

思わず昼が呻き、太刀を手から取りこぼした。

その首の横に祢々切丸を突きつけ、

「今度こそ俺の勝ちだな」

と夜は笑つた。

しかし下にあつた昼の体が突然持ち上がり、首に片腕が回されたと思つと、その頬に柔らかな唇が押し当てられた。

「！？」

！？

夜も妖怪達も一瞬のこと驚いて声が出ない。

その間にもう片手が首に回され、鋭い簪の先端があてられた。

互いに簪と太刀を首筋にあてあつたまま抱き合つてゐる。

ぐすくすと暁は笑つた。

「どうする？ 一緒にせーので刺してみる？」

「……まだ心中するほど仲じやねえだろ」

「やうだね」

と二人は息を合わせたように互いの得物をおさめた。

「じゃあ心中したくなつたら言つてね。一人分の片道切符用意して
いたげる」

「それは心中とは言わん！ だいたい太刀の勝負じやなかつたのか
！？」

「だから血口流で楽しむと言つたじゃない。妖怪とは体力差がある
んだ。当然のハンデだよ」

今……何かがわかつた……

本家の心中を何ともいえない空気が駆け巡つた。

「これは無理強いできないのでなく……」

「させてもうえないのでですね」

「何もない状態から尻にしかれますよ」

「そつか 許婚者殿の絶対王政だったか……」

無敵が素敵とは！ 若つてそういう趣味！？

誤解はまたしてもあらぬ方へ転がるのであつた。

夕方、かなり陽が傾いて茜色に染まる空氣の中を、暁はその光を映したような剥いた柿の実を持つて夜のいる縁側にやつてきた。

暁間の騒ぎで疲れたのだらう。夜は夕焼けに染まりながら、いつの間にか眠つてしまつていた。

「ひなんとこりで寝て。風邪をひくよ」

暁は呆れて呟くと、側の部屋からかけてあつた着物を持ってきて上にかけた。

それに起きる気配もなく、静かに寝息をたてている。

そんな夜を見ながら、暁のリクオは側の縁側に座り足をぶらぶらとさせた。

銀色の髪が優しい夕日色に染まつている。

まつたく……人がいいんだから……

その寝顔を見ながら、暁はそつと内心呟いた。

さつきの試合、夜が使っていた袴々切丸は退魔刀で人間は切れな

いのだと雪女から聞いたのだ。

本当は生贊の僕なんて人並みに扱う必要なんてないのに……

四肢を部下に押さえつけて、自分は強引に突き入れればそれだけで終わる。体を愛する必要などどこにもない。それなのに、僕の許容範囲をはるかに越えるようなことはせず、どこか人並みな扱いをしようとする。

初めての夜もそつだつた。こちらが寝たふりをしたら、寝込みを襲うことなどせず、言葉通りその日は諦めて眠ってしまった。

次の日もその次の日も、一度諦めたら言葉通り手を出してこなかつた。

なんで妖怪の君の方がこんなに真っ直ぐで、人間の僕の方が捻れてるんだか……

寝首をかかれると考へもしないのだろう。

ふと、ぶらぶらと動かす足を見つめていると、その膝の当たつた袂がしゃんとなつた。

一回も自分の身を守ってくれた銀色の簪を取り出し、じつと見つめる。

苔……

彼女はまだ村にいるはずだ。

泣いていないといいけれど……

妖怪の許婚者で、自分とゆらしか友達のいなかつた少女を思い出す。

じつと簪を見つめる暁の後ろで、夜は鼻をくすぐる甘い匂いに田
が覚めた。

ふと見上げると、暁のリクオが茜色の大気の中、柔らかな髪をや
の色に染め上げ、茶水晶の瞳が黄蜜に紅茶色に透き通つている。

紫がかつた青い空の下、その残照に彩られた姿はひびく眩しく透
明に見えた。

「こいつって……こんなに綺麗だったのか……？」

とくんと心臓が一打ちした。

その音が聞こえたわけでもないだろ？ が、暁が振り返った。

「起きたんだ？」

「ん……ああ」

「惜しい。寝首をかく機会だったのに

と暁は簪を口にあて笑つた。

「お前な？」

がくりと夜はうなだれた。

「冗談だよ。ほら、柿を剥いてくれたんだ。食べるだけじゃ」

と橙色の木の実を盆」と差し出した。

「あ、うん」

夜は起きあがるとあぐらをかいた。すると肩からかけられていた着物がばさりと落ちる。

まさかこいつがかけてくれたのか？

信じられない思いでその着物を見つめる。

振り返った先で昼は一個を爪楊枝にして取ると、いただきますと言つてからもぐもぐとかじつてくる。

「うそ、おいしい」

昼が嬉しそうに笑つので、思わず夜は尋ねた。

「お前 柿が好きなのか？」

「うそ」

あつせり返事が返される。

「ふうん、何でも食べてるから嫌いなものなぞうだしな。ほかに何が好物なんだ？」

「あけびに山葡萄、野苺にぐみ。栗も好きだけビ、見つからなこよ
うに焼くのが難しくて」

「見つからなこよひこつて……」

全部山で獲れるものじゃねえか……

夜は絶句した。

「お腹すいた時、新拾いに行くと言つてはヨドヒツとつべてたんだ。
後、しめじや椎茸、蕗やつくしも好きだよ」

無邪氣こへりつと振り返ると夜は笑つた。

「君の好きな物当てみようか?」

「知つてゐるのか?」

夜は驚いた。

「先ず酒でしょ? それからために干し鱈、昆紐めわい。後刺身
にたたき」

「 よく見てるな……」

と夜は驚きを通り越して呆れてしまつた。

「君の好みはわかりやすいよ。酒の肴かなまもの系なのさ、やっぱ
り妖怪だから?」

「なまものが好きなのがどうかは知らねえが、単純においしいだろ
うが」

「突然僕の腕かじつたりしないよね?」

「するか! 人肉に興味などないわ! !」

「えー? 妖怪といえば、赤子の生き肝を食べる話が有名でしょ?
子供は管轄外?」

「俺は内臓系は嫌いなの!」

思わず昼がくすくすと笑い出した。

「それって 妖怪としてはどうなの?」

「つるさいなあ。嫌いなものは嫌い! あの妙に粘つこいのが嫌だ
!」

まるで子供みたいだ。

昼は笑いをおさめることができなかつた。

「君つて味覚が大人なんだか子供なんだか 」

手に持つた簪が昼が笑う」とこしゃらしゃらと鳴つた。

ふと、それに田をとめ、夜は呴いた。

「その簪 誰のだ?」

なんでもそんなことを訊いたのか自分でもわからない。ただ本当に口をついて出た。

「気になる？」

くすりと昼が笑った。

「そりゃあ　自分の許婚者が他人の簪持つて気にならねえ奴はいないだろ？」

そうだ、だから訊いたんだと心の中で頷いた。

「僕の一番大切な人間」

昼は簪を宝物を見つめるようにそっと両手で包んだ。

なんだ……そんな奴がいるんだ……

簪ということは女なのだろう。それも普通以上に親密な間といふことだ。

なんだか……面白いな。

心で夜が亥く前で、昼は愛しそうに見ていた簪を胸に大事にしました。

秋の夜を告げる風がふわりと流れて、色づいた木の葉をかさかさと揺らした。

「へしゃんー」

と暁がくしゃみをした。

それでようやく夜は、暁が来てから一週間以上たつていること二
気がついた。

秋は気温の移り変わりが早い。一週間もあれば十分に冷え込む。
人間ならば、尚更こたえるだらう。

「お前、ひょっとして寒いのか？」

よつやく気がついた事実に慌てて尋ねた。

「うんまあ、少し」

と暁は笑った。

「馬鹿！ なんでもひとつ早く言わないんだ！ 来い！」

そう言つと、夜は暁を浴室に連れていき、押し入れを開けて一番上
にあつた柳行李を取り出した。

その蓋を開け、色とりどりの着物から羽織を探し出す。青に華や
かな菊の大輪を描いた羽織を持ち出すと、夜はそれを暁に差し出し
た。

「俺のお古じや嫌かもしけねえが、取り敢えずこれ着とけ。お前ぐ
らいの背丈の時のだ」

しかし匂はじつとやの羽織を見つめる。

「それ着たら 代わりに着物を脱げとか言わない？」

「言わねえよー。どんな変態だ、俺はー?」

「だつて君に頼み」としたら、代わりに抱かせると言われるかと思つて

「俺はゞいまで極悪なんだよー? そんな弱みにつけむよつない」とあるがー。

「へえ」

にやりと匂が笑つた。

「弱みにつけむよつない男いらしくない」とまじないんだ?」

「当たり前……」

はつと夜は氣がついた。

やられた……！

これでもうその方法は使えない。いや元々好む手ではないが、先回りして手を打たれたのは否定できない。

「わーじゃあ喜んで！ 僕こんな華やかな羽織初めてだ！」

しかし今更やつぱりなしなんて言えるわけがない……！

くつと夜は涙をこじらえた。

しかし田の前では昼が本当に嬉しそうに羽織を着てくる。せりふやら氣に入ってくれたら嬉しいのが慰めだ。

「お前　お古は嫌じゃないのか？　ましてや俺のだぞ？」

その様子に夜は尋ねた。

「そんなことないよ？　僕に自分から進んで自分の着物をくれたのは君と竜一さんだけだ」

意外そうに毎は答えた。そして夜の誤解に気がついて、ああと笑つた。

「みんな妖怪の許婚者に自分の着物やるなんて嫌だつて言つんだ。くれるのは新しいのを作りたくない親だよ。だから自分から着ていいなんて言つてくれるのは嬉しい」

さすがに返答に詰まつた。何故なら、毎がそう言われた元凶は自分だ。だから当たり障りのないとこいで返した。

「その竜一つて何者だ？」

「僕の親友のお兄さん。嘘つきで陰険で詐欺師で、もつ毎口鍛えられた鍛えられた！」

そいつがいらん」として「こいつの性格ができるがつたな！？」

と夜は恨むべき相手を見つけた。

「陰陽師で、妖怪の仲間になる僕なんて嫌いだつて言いながら毎日頭を撫でてくれるの！自分で自分を嘘つきだと公言しているんだよ」

「ほおー人格に多大な問題がある奴なようだな」

「うん！間違いなく一般人と妖怪の敵」

だから一般人の敵の僕には優しかったんだよ。

そう笑う暁のこれまでにないあどけない笑顔に胸の奥がきしりと鳴つた。

数日後の晴れた青空の下、夜は突然朝の片付けを終わつた暁に言った。

「暁！ でえとに行こつー！」

すかさず簪が眉間に当たられた。

「何か言つた？」

「……一緒に祭りに遊びに行きませんか？」

ちやらと音がして簪がしまわれた。

「祭り？ なんでもまた

「

「お前多分ゆづくり遊んだことないだろ？　たまには息抜きも大事だつて」

「まあ　確かに……」

祭りはいつも眺めるだけだつた。行つてみたくないと言えば嘘になる。

「じゃあ決定な！　すぐに驥車用意するから、その間に準備しつけよ」

と夜は上機嫌で行つてしまつた。

準備と言われても、せいぜい羽織を着るぐらいだ。夜が自由に使つていいと言つた柳行李の着物の中から、悩んだ末、赤に黄色い紅葉が描かれた羽織を選び身につける。

表に出ると、夜が驥車の横で太刀を持つて待つていた。祢々切丸ではない。それを投げてよこす。

「祭りには色んな奴が来る。護身用に持つとけ」

と笑つた。

「がたん」とんと牛もないのに驥車は動き出すと、やがてぎしづと音をたてて空に舞い上がつた。

「どこの行くの？」

下を見ながら尋ねると夜は楽しそうに答えた。

「ひのシマの方だ。そこは土地神が今日祭りしこ」

暫く空の散歩を続けると、驥車は降下を始めた。人目につかない山裾に降り、そこから町に入る。

そこはリクオのいた村より格段に大きな町だった。沢山の人が行き交い、町にある大きな神社には出店がびっしりと長い参道を埋め尽くしている。それだけでは足らず、境内の外、町の家の側にまで出ていた。

綿菓子に鼈甲飴、焼きイカやうどんまである。ほかにも陶器や骨董品、細工物まで売っている店もある。

「ま、お前の小遣い」

夜は小さな袋を畳に渡した。

「せ、中で食へ過ぎるといやねえぞ」

僕に……小遣い。

秀元さん以外からは初めてだ、と畳は嬉しそうにそれを受け取った。

初めて屈託なく無邪気に受け入れた畳に、やつぱり祭りに憧れていたんだなと夜は来てよかつたと思つた。

実は昨日の夜、シマの報告がつい側近と話していく、雪女が、

「祭りといえはでえとです」

と言こと出して思ことついたのだ。『』以前にも来たことがあるから、わづと喜ぶだわづと思つたのだ。

金魚すくいに挑戦している匂の側に行き、自分も試してみることにした。しかし赤い小さな魚はすばしつゝ、簡単には捕まらない。掬う紙は簡単に破れ、一人は残念賞の一匹の金魚をもらつて笑いつた。

「夜！　これ食べよ！」

と匂は綿菓子を指差した。

ふわふわのそれは大きくて、見ているだけで甘やかだ。

「俺はいい。お前食べろ」

そつぱつと、匂はんーと考え込んだ。

「じゅあ、僕が買つて半分」じょつー。一緒に食べよつ？」

ふわふわの雲のようなお菓子を一つ齧つと、一口ぱくつと食べて、

「溶けるー。」

と驚いていた。

「そりゃあ　綿菓子だからな」

と開いた口に綿菓子をぎゅうっと埋められた。

「あははー、おこしいでしょ？」

「甘い」

顔をしかめながら夜は口の回りを舐めた。顔中に綿菓子がついてペたべたする。

「せり、じつこぐる」

昼が手拭いで顔を拭いてくれた。

出店を見ながらふらふらと歩いていると、側の店から声がかかつた。

「お兄ちゃん、かわいい彼女だね。一本贈つてあげなよ」

見れば簪を露店に並べて売っている細工師だ。

「彼女じゃない。許婚者だ」

夜は律儀に訂正したが、昼は半眼でそれを聞いていた。

「なり是非贈つてあげなよ。簪を贈るのは愛の証だよ」

どつもの細工師は昼を完全に女の子と想つてゐるらしい。まあ、赤い紅葉の羽織に赤茶色の着物を着ていれば、見間違つなどこのみも殺生な話だが、誤解の決め手は夜の発言だろう。

「結婚前には男から簪を贈るものだよ。夫婦の約束に一本どうだい？」

「いつ言われて、思わず露店を覗き込む夜は思わずつっこんだ。

「おーい、よく考えろ?」

「うん、これなんかどうだ?」

と夜は自信満々に桜の簪を手に取った。

「いや……僕は君がどの発言に共鳴したのかが謎なんだけど

「だつてお前簪武器に使つだろ? だつたらいいじゃねえか」

「まあ…… そうだけど」

まったく、と言しながら仕方ないので自分も一緒に細工物を見ることにした。銀杏や藤、南天に稻穂、朝顔など色んな簪が華やかに並んでいる。それらを見比べながら、昼は一本を手に取ると、その切つ先を確かめた。

「うん、これがいい」

とその椿の花のを持ち上げた。先端も鋭いし、握りやすい。

「お前、椿が好きなのか? 桜の方が似合いくつのに?」

それを見た夜が言つと、細工師が一本の桜色の簪を取り上げた。見

れば、桜の花を大きくしたような薄紅の花がついている。

「兄ちゃん、それも椿だよ。それなら桜みたいだろ？」「

それを夜は受け取ると、そつと匂の髪に挿してみた。

「うん　」の方がよく似合つ

似合つと言われて、眞面目に自分を見つめてくる月の光のような金の匂は思わず赤くなつて持っていた椿を落としていた。

「あ、ありがと？」

「オヤジ、これくれ

と金を払つと、夜は匂の方を向かいそつと簪に触れた。

「今度から俺を狙う時はそれでやつてくれ。もう一本ほどこかにしまって、いつもそれを身につけていてくれ」

それに匂は真つ直ぐ視線を返しながら、

「妖怪つてわからない」

と溜め息をついた。

「自分が殺される得物を選ぶつて自虐趣味？」

「だから俺を変態扱いするなつてー」

二人が金魚を持ちながら、あちこちの店や見世物小屋を覗いていると、突然悲鳴が聞こえてきた。

何だ、と脇がそちらの方向を見ると、逃げる人々や騒がしい声が聞こえてくる。

「妖怪だ！」

「妖怪が出たぞーー！」

叫び声に混じって切れ切れに聞こえてくる。

「おいでなすつたか」

にやりと夜は笑うと、袴々切丸を取り出し、喧騒の方へと走り出した。

脇も慌ててついていくと、それは神社の拝殿の前で、賽銭箱を抱えた鬼達が一人の年配の女性を踏みつけている。

「おらーー！こらで無事祭りをしたかったら、俺らに上納金を払いな、土地神さんよつ」

「いじつは貰つていくぜー！ たんまり入つていそうだ」

「ま、待つて下さい……それをとられたら来年の祭りが……」

蹴られながらも必死で女性は言い募つてゐる。

「そんなん俺らが知るかよ」

「来年は来年で来てやるから、しつかり稼いどけよ」

と三回の鬼達は声高く笑つてゐる。

「待ちな」

夜が肩に剥き出つの袴々切丸を抱えて鬼達の前に歩み出た。

「お前達か。最近祭りの度に元氣のいいのシマを吊りじてゐるところの

「なんだ？ お前」

鬼がぎろつと見た。

「優男は引っ込んでな！ 怪我するわー」

「俺を見て優男と言ひつけば三下以トだ」

「なんだとー？」

鬼達が色めき立つた。

「生憎一いつひつかのシマでね。勝手なことをされでは迷惑だ」

と夜は艶々と語つた。

「首を置いてくか、今までとった金全て返すかビアカ選べ。後者なら半殺しにするだけで許してやる」

「言わせておけば若造が！ 思い知らせてくれるー。」

と鬼達が一斉に襲いかかってきた。

「昼ー、背後は任せたぞ！」

そう言いつと、田の前の鬼に一太刀浴びせた。

「仕方ないなあ」

と答えると、金魚を側の人の手に押し付け、すらりと太刀を抜く。さうりと光る刃に夜の背後から襲おうとした鬼の血飛沫が飛んだのはその直後だった。

さすがに体がでかい。一太刀では致命傷にならないと、昼は更に胸を突き刀で抉つた。

ぐらりと鬼の体が揺れて、背後にそのままずんと倒れた。

夜の方も相手の胴体をかち割り、その巨体を倒れさせた。

「後一匹」

と夜が刀を鬼の首にあてた。

「これで最後」

と昼がもう片側に刀をあてるとい、一人で同時にひいた。

絶叫と大量の血を飛ばし、鬼は息絶えた。

「やつぱり俺の背後を任せられるのはお前だな」

夜はにつと笑つた。

「まつたぐ、祭りに連れてつてくれるなんて『前がいい』と思つたら
いづこいつ」と

と昼は呆れながら呟いた。

夜は踏みつけられていた土地神のといづへ行くと、

「大丈夫か？」

と尋ねて手を差し出した。

「あなた様は奴良組の若頭……ありがとうございます。本当に助かりました」

「なあに、いづこいつ時用につちが金を納めてもらつてるんでね。用心棒は当たり前や」

と泣き崩れる女性をそつと慰めた。

ふつと……

腕組みして昼はその光景を目にしていた。

利用された感は否めないけど、まあ優しいよね……

と面白くなく呟いた。

観客の一人から預かってもらつた金魚を返してもらい、血糊を拭つて太刀を鞘におさめると、戻ってきた夜に言つた。

「さあ、用事もすんだことだし、そろそろ帰ろうか

すると夜は不思議そつに言つた。

「何でだ？ これはついでだ。まだ終わっちゃいねえ」

「え？」

そつ言つと、夜は「ひつちひつち」と眉を神社の裏の山に連れて登つた。

山と言つても杉や松が植えてあるからそつ見えるだけで、実際は丘ぐらゐの高さだ。

登りきつた時、辺りは薄い闇が降り始めていた。その中を田の前一面に青い海が黒く光り、波立つ海原からは月が周囲を紫色に照らしながら昇つてくる。美しく雄大で荘厳な風景だった。

海風が眉と夜の頬を撫でてすぎた。

「きれいだろ？ 昔来て、じいの田の美しさに惹かれたんだ

と夜は海を見ていた田を眉に向けた。

「だからお前にも見せてやりたかった。お前　多分海も初めてだ
わい？」

僕の為？

「…………うん」

夜を見つめながら答えた。

波は寄せでは返し、金色の月の光を幾度も茶色い砂地に恋い焦がれるように送つてくる。

なんて優しい妖怪。

昼はくすりと笑いたくなつた。

僕が欲しかつたもの全てを持つていいくせに。

もしも、君を僕のものにしたらと昼は心の中で呟いた。

真っ直ぐな君を僕なしではいられない程虜にしたら、僕は一番欲しかつたものを手に入れることができるのかな。

それがどんなに歪んだ形でもいい　　と昼は夜を見つめ、それは綺麗に微笑んだ。

「ありがとう。本当に嬉しい」

月の光の中、その星の光を集めたかのような冴えたまばゆい笑顔に、夜は初めてこいつに触れてみたいと思った。

暴かれる眞実

それから数日後、昼のリクオは風邪をひいて、朝から寝ていた。

朝起きよつと迷つて体が重い。ふらふらで着替えよつとした時、眩暈がしてつさくまつてしまい、それに気付いた夜が飛び起きたのだ。

「馬鹿！ 熱があるじゃねえかー…？」

熱い昼の体を抱えて、布団に連れて行くと、もう一度横たえた。

「あはは……失敗。やつぱりおとつこ紅葉のトドつりりと雪合戦したのがまずかったかな？」

「なんでそんな寒い」とするんだよー。」

「だつて綺麗だつたんだよ？ 紅葉に積もる雪つて」

「わざわざ異常気象にして体に異常を起しそんなー。風邪をひかすむのは馬鹿だけなんだぞ」

「わー夜が僕のこと褒めてくれたのって初めてだ

「褒めどらー！ 呆れどるんだー！」

「えー？ だつて馬鹿じゃなーって言つた

「お前が馬鹿だとそのお前にせぬられまくつたる俺ばぢつなるー。」

「んー馬鹿リクオコンビ」

軽く頭をこづいてやつた。

「いたい……病人に暴力ふるうなんて虐待だ」

「俺はお前から毎日殺人未遂にあつとる。どちらが重罪だ」

「え……？ 人道的に虐待でしょ？ 僕のは正当防衛だもの」

「俺の正当防衛権を認めろ！」

「えー妖怪が人間にそんなこと言つのはおかしいって

昼は布団の中でくすくす笑っていたが、体力を使い果たしたのか、疲れたように口を閉じた。

「ほら、寝てろ。今氷と薬持ってきてやるからな」

「媚薬は嫌だよー」

「だから俺にも良識はあるつてー 病人を襲う趣味はない！」

「んー熱で頬が上気して色っぽくなるつてきぐになあ

「……頼む。俺に良識とつきあわせてくれ

「はいはい」

昼は笑つて答えると、すうっと目を閉じた。かなり体が重い。だい

ぶ熱が出たのだろう。

少しやりすぎたかな……

おとついの雪合戦を思い出した。

でもあれぐらこしないと寝込めそうになかったし……

思つた通り、夜は自分を心配してくれた。

「それで今夜の気持ちが推し量れる……

そう思いながら、昼は闇の中に吸い込まれるように意識を飛ばした。

目が覚めた時、頭の上には巨大な氷の袋がのつており、体の横で夜が汗を拭いた手拭いを桶で洗っていた。

「ん？ 起きたのか？」

夜は手拭いを絞つて桶にかけると、昼の顔を覗き込んだ。

そして氷をよけて、そつと額に手をやる。

「まだ熱があるようだな。今日は一日ゆっくり寝てろ」

「ずっと……つこいてくれたの？」

昼はその金の瞳に尋ねた。

「ああ。今日は特に用事もねえしな。おかゆをお袋が作ってくれたが、食べれるか？」

暖かな湯気がまだ微かに残る器を差し出された。

「うん……食べる」

と毎は夜に支えられながら身を起こした。まだふらつく体を支えるため、夜は毎の背中に枕や座布団をあてて後ろに倒れないようにしてくれた。

「ありがとう」

「いって。それにお前に礼を言われるなら毎日でも悪くねえなあ

と夜は優しく微笑んだ。

おかゆはのりと卵と鮭の身をぼぐしたものが入っていた。

だいぶ冷めではいたが、やなどをしなこうやつくりと一口一口さりげなく食べる。

「お袋から人間用の風邪薬もらつてきた。食べ終わったら飲めよ」と側に置いた。そして席をたととする。

やつぱり……いろんなものかな？

簪で期待したけれど、あれはささいな独占欲かもしない。

「暖かいお茶にかえてくる。すっかり冷めちまった」

そう言つた、夜は急須を持って出て行き、すぐに暖かいお茶と共に
戻ってきた。

戻ってくれた……

でもまたすぐに部下と交代してしまつかもしれないと俯く。

「なんだ？ もうこりうねえのか？」

いつもは残さず食べる皿が箸を置いたのを見て、夜は心配でつい尋ねた。

「うん やつぱりあんまり食欲がない」

「仕方がないなあ。じゃあもつ薬飲んで寝る。寝つくまで側についててやるから」

その言葉に毎は夜を振つ返つた。

「君がこいでくれるの？」

「あ……ああ。でも俺以外の方が安心するんだつたら……」

「さひさ」

と毎は首を振つた。

「君がいい。君は僕に嘘の笑顔を見せない。……一番安心する

「やうか？」

と夜は嬉しそうに畠の背中をぽんぽんと叩いて抱きしめた。それは幼子をあやすような仕草だった。

「俺はお前の側はいつもドキドキする。まあ毎日殺されかけてるしな。でも俺にそんな風に体当たりしてくれる奴はいなかつたから、なんだか気持ちがいい」

初めて抱きしめていたことに気がつかない程自然に畠は笑つて、ゆっくりと布団に横になつた。

「お願い。眠るまでだけ、着物の裾を握らせていて」

畠はそつと指先で掴んだ夜の着物を持ちながら、茶水晶の瞳で訴えた。

「ああ、いいぜ」

本当は手を繋いでやりたいと思いながら、夜は返事をした。

遠慮するように持たれた着物の端、それでもそれは自分がいることを確認するためのもので

言い知れぬ愛しさが夜の中へこみあげてきた。

「いいのは強がっているけれど、俺を必要としてくれる。

三代目でもなく、妖怪でもなく、ただの奴良リクオとして。それは初めての感慨だった。

「こつは僕に好意を持ち始めている……

昼は日を薄く開けて、掘んだ着物を見ながらそう思った。

だとしたら、そんなことは難しくない……

病気の間、夜は布団を別にした方がいいのではないかと昼は言ったが、

「妖怪こいつらねえだろ」

と夜は熱にうなされる昼の背中をさすりながら少しでも楽に寝れるように側に横たわってしてくれた。

外は日ごとに寒さを増していくが、布団の中は伝わる人肌の体温で暖かく、それに体を温められて昼はひどい風邪だったにもかかわらず、急速によくなつていった。

すっかり体も本調子に戻り、いつもの生活に戻ったが、改めて人間の体は脆いと実感した本家の妖怪達が心配するので、今日も早くに寝間に追いやられていた。

勿論、本家の妖怪の下心はそれだけではない。少しでも若と二人きりで過ごす時間を増やして、いい雰囲気になつてもらおつという魂胆だ。

若がつききりで看病して以来、どこか一人に親密な感じが漂つことがあるからだった。

そんな訳で、先に寝間に来て、することもないので布団に入つてころころしていた昼だったが、やがて遠くの方で大勢のざわめきが聞こえ去つていった。

それから暫くして、夜が疲れた顔で寝間に入つてくると、じろりと布団に横たわつた。

「なんか疲れているね？」

と昼は尋ねた。

「幹部会だ。俺の三代目襲名でまたもめた」

と夜は目を閉じたまま呟いた。

「誰か反対しているの？」

と横たわつたまま、顔だけ上から見つめるようにして尋ねた。

「色々いるが、まあ急先鋒は一つ目だな

「一つ目?」

「じじいの時からの古参の幹部で、ちょっと調子に乗りやすいが女子供には優しい男気に溢れる奴なんだが一人間の血をひく俺を三代目にするのは嫌らしい」

「人間が嫌いなの？」

「いや…… それでもねえんだが。お袋とは特に仲悪くないし、そうは言つても異類婚は珍しいからな。人間の母親をもつ俺は不安といつたところだろ？」「

「許婚者の決まりがあるのに？」

「あれは一部の大妖怪だけだからな。一代続けて異類婚になつたのは珍しいらしい」

「ふうん」

と昼は夜を覗き込んで、にこりと笑つた。

「ねえ、面白い話してあげようか？」

ん？ と夜がその閉じていた瞼を開けた。するとすぐ近くで茶水晶の瞳が優しく微笑んでいる。

「明日が借金の返済日という夫婦がいました。でも家にはどこを探しても返せるお金なんてありません。借金取りは明日返さずにすめば、次は一月後まで来ません。さて夫婦はどうしたでしょう？」

「二人で一日夜逃げしたとか？」

と夜はその瞳を見つめながら尋ねた。

「残念！ 答えは朝から大喧嘩！ 茶碗は投げる布団は投げる、第

を持つて叩いて追いかける。あまりのことに借金取りは金を返せと口を挟む暇もない。とうとう夕方になつて、借金取りは諦めて帰つてしましましたとさ」

「あははー、なんだ、そりやあー?」

「ね? どうしようもない状況に見えても、案外意外な解決法が転がつてこむものだよ」

だからあんまり心配しないで。

と暁が優しく笑うにつられて夜も笑んだ。

「そうだな 纏まる時は意外とあっさり纏まるかもな」

「そうだよ。人間の僕も協力して、人間への偏見をなくすよ」

「暁……」

俺の為にと言つてくれるのが嬉しい。

「ほら、元気を出して」

と暁は夜の頭を抱え込んで、何度も優しくその銀色の髪を梳いてやつた。

「君の髪つて、まるで薄みたいた。銀色に光つてすげく綺麗……」

「暁」

と夜は胸に埋めた顔を持ち上げた。

すゞく、触れたくなつた。こうして抱き締められてこるのは足りない もつと深く触れてみたい。

でも夜はにこりと笑んだ。

「君つてなんだか弟みたいだ」

夜の眼差しが焦がれるものに変わつたのは気がついた。

でも許してやらない。

体を許すのは最後の交換条件を飲ますのと引き換えでないと意味がない……

その毎の発言に夜はかなりショックを受けたようだった。

弟……

「…………なあ、なんで俺が弟？ 外見からしてもせめて兄だらうが」「

本当は……きっと兄弟なんて嫌だけれど……

「え？ だつてこんな手のかかりそうで、すぐ僕にひつかかる兄なんて嫌じやない。でも弟ならそこが可愛いかも！」

「かわいいって……毎日苛める『だ』

「嫌だなあ、可愛がるんだよ」

惱みを露つて軽口を言つて……そんななんでもない」とが、

君は誰ともできるわけではない。

その心地よさをゆづくつ骨の中までしみこませると、と面は優しく笑つた。

数日後、よく晴れた朝、昼は夜に尋ねた。

「夜、今日何か用事ある?」

「いや　ないぜ?」

と今日の予定を思ひ出しながら、夜は答えた。すると面はつと笑つた。

「じゃあ今日は僕に付き合つてよ。一緒に菖蒲に行こう

「は……? 菖?

と夜は唐突な言葉に驚いた。

「ほら、この間お祭りに連れて行ってくれたじゃない。あれのお礼。風邪ひいたりですつかり遅くなつたけど、今なら松茸が出る頃だし、ちゅうでござりまへ

「お礼?」

「うん！ だつて僕ほかに思いつかないんだもん。菖なんらか知つてるから教えてあげれるよ」

多分、君菖狩りしたことないでしょ？ ところの言葉に夜はこくんど頷いていた。

「それってでえと……」

「何か言つた？」

とびつと椿の簪が首もとに飛んできた。

「いえ……何でもありますん」

「じゃあ籠とか用意してくるね」

と毎は爽やかに笑つて行つてしまつた。

俺の簪、身につけてくれているんだ。

ひどく嬉しくて顔が綻んだ。

すると本家の妖怪達がわらわらと集まつてきた。

「若ー これはチャンスですぞー！」

「これせやつぱつでござりやー 誘われたんですよー… あの毎様からー。」

毎が来てから一月たち、若当で早い時期にかけていた妖怪達は敗

者復活戦とばかりに新たに賭け直していた。

「今日はこそ射止めるチャンスです」

「場所は人気のない山の中、そこで一入つきり。何もしないでは男がすたります！」

「告白です！」

「いや、こきなり口づけるのも印象づけれますぞ…」

「いっそ押し倒して……」

「毒薙を口の中に入れられると」

と夜が呟くと、全員がはつとなつた。

そうだった……！　臣様は天下無敵のかかあ天下！

それを相手に武器のある土地でことに及ぶはあまりに無謀すぎ
る……！

「若

と鴉天狗が言った。

「どうぞ」無事でお戻りを

「御武運を陰ながらお祈り申し上げます」

「死んではなりませぬ……死んではなりませぬぞー。」

「うむせえ！ 死地に赴くみたいな挨拶するんじゃねえ！」

と夜は怒鳴り散らした。

驄車で黒羽丸から教えてもらつた草のよく出る丘に行へと、畠は落ち葉をがさがさと踏みながら歩いていった。

「もう少し行くと赤松の林があるそうだよ。そこはよく手入れされていて、松茸がよく出ると評判なんだって」

と畠は楽しそうに籠を持ちながら言った。

「君も松茸や椎茸やしめじは知つているでしょ？」

「ああ。その辺なら食べたことがある」

「松茸には真つ白なシロマツタケモドキってのもあってね。これも食べれるんだよ」

「ふうご」

と夜は頷きながら畠の後をついていった。

雑木林の中を歩き、倒れていた木を乗り越えたところでの、ふと地上に生えている草に気がついた。

ふわりと丸い笠に太い柄の真っ白な茸が生えている。

「あ、これお前が今言っていた奴じゃねえか？ 白いが松茸そつくりだぞ！」

と手を伸ばそうとした。

「触るな！」

と恐ろしい勢いで手を掴まれた。

振り返ると畠が睨みつけようつた真剣な形相でこちらを見ている。

「触らなかつた？」

「あ、ああ……」

と夜は頷いた。

ほつと畠は手を離した。

「それはそつくりだけど猛毒のドクツルタケだよ。食べたら死ぬよ」

「えー？」

と夜は驚いた。その夜の表情を見て、よつやく畠はこつもの笑顔を思い出した。

「あ、でも妖怪ならわからないかもー」

と笑う。

「試しに食べてみる？」

「俺で人体実験する計画はやめてください」

いきなり毒薙を当ててしまつた……

夜はうーんと考え込んだ。

せまつはひじかみをしたい。

初心者なのにそんな見栄が働いたのは、やはり昼のリクオの前だからというのが大きかったろう。

歩きながらせよのせよと周りを見回し、木に生えてくる茸を見つかる。

「これは見た」とある。 とはあつと顔が輝いた。

「暁！ 見つけたぞ！ あそここの木に生えているやつ、あれ椎茸だ
わづー？」

と夜はいそいそと話しかけた。

「あれはツキヨタケ。よく似てるけれどあれも毒茸」

ずつんと夜は落ち込んだ。

「すゞ」いねー毒草をこれだけ短時間で二連チャンとは。ある意味天

才

「からかってるのか！？」

「いや、今度は君とぜひ毒草狩りに行きたい。殺傷能力の高そうなのがどんどん採れそうだ」

「それ誰に使う気だ！？」

「君と君と君と君と君と それと君。全部で六人」

「一人だろうが！ 限定してるだろうが！？」

「え？ だって心中の一人用片道切符頼まれた時用に」

「頼まん！ 心中するならお前とするー」

「へえー」

と昼は笑った。

「僕としたいんだ？」

え！？

と夜は口を押さえた。

今何言つた？ 僕？

しかし昼はにこにこと笑って、

「わあ、行こう。」

と夜と手を繋いだ。

一人で手を繋いで山道を歩くのは楽しかった。

手を繋いで登り、小さな沢を渡った。夜がそっと畠に手を差し出してくれて、濡れないうに石を渡らせてくれた。

少し歩いたところで、広葉樹林の邊つた落ち葉ごみをとられた畠を助けようとして、夜が咄嗟にかばつた。

すると、その手にまた草を一本掘んでいた。

また、草……！

と夜は怖々畠にそれを見せた。

「あの、う……こんなのが見つけたんだけど……」

ふうと畠は溜め息をついた。

「まったく畠はどうしてやう変わった草を元に戻してやるのかな？」

「また毒草ー？」

「それはバカマツタケっていうんだよ」

「バカ！？ やつぱり毒！？」

三連続！？

夜が打ちのめされようとした時、暁が言った。

「「さまつ」と呼ぶところもある。松茸より香りが強くてとても美味しい珍重される茸だよ」

「え！」

と夜は驚いた。

「だつてバカマツタケって」

「うん。味や評価の割にかわいそうな名前なんだよね。本当はもう終わってる時期なのに」

いいのが採れたね、と暁は笑った。

なんだか嬉しくて夜も笑つた。

「今夜、これ一緒に食べようぜ」

「そうだね。僕もそれはあんまり食べたことないや

と二人は笑いあい、そのままその倒木に座つて休憩することになった。

そして山の斜面の蔓草になつていた赤い草の実を探つて二人で食べた。

それは赤い透明な細かな実が幾つか寄せ合つて小指の半分ほどの丸い実をつけており、口の中に入れると甘酸っぱさが広がる。

「おいしいでしょ？」

と匂は笑つた。

「うん」

と夜はその笑顔を見ながら答えた。

「匂、うー」

とまつペを指差す。

「赤い実がついている」

「本当? うー」

と匂は顔を夜の方にむけた。

その赤い実に誘われるよつて、夜は唇でそれをはさみとつた。

甘酸っぱさが体中に広がつて眩暈がするよつだつた。

すくなく危険だとわかつてゐる……まるで麻薬のように甘く

て蠱惑的でやめられない。」にいつに中毒になりそうだ……

と暁の笑顔を見ながら、夜は思った。

そろそろ行こうかと話している時、突然頭上から黒羽丸の声が響いた。

「若！ 暁様！ どちらにおられますか！？」

見上げると、優秀な側近が山の上を飛び回つて一人を探している。

「おう、いじだ！」

と夜は手をあげて振つた。

それを皿ざとく見つけて黒羽丸が降りてくる。

「どうした？ いつも冷静なお前がそんなに慌てて

と夜は腕組みしながら尋ねた。

「お一人ともすぐに屋敷にお戻りを。大変な方がおみえです」

と黒羽丸は片足をつきながら言った。

そして連れてきていた驄車に一人を乗せると、すぐに本家にむかった。

屋敷につき、玄関についた朧車を降りる。

屋敷からは小妖怪から側近までが、若の姿を見つけて安堵したようわらわらと飛び出してきた。

「若！ お帰りなさいませ。実は大変なお客人が

といつらりの言葉を遮つて、庭の紅葉の上から声がした。

「やれやれ待ちくたびれたの」

その声に一人が紅葉の木に目をやると、闇色の打掛を纏つた長い黒髪の女性が、紅葉の上から一人を見下ろしている。

「久しいの、ぬらりひょんの孫。わらわが妖力の回復の為眠つていた間にむさくるしい男になつたの」

「羽衣狐！」

と夜は叫んだ。

何故京都を統べる大妖怪がここにいる！？

袴々切丸に手をかけた。それに羽衣狐はくすりと笑つた。

「今日は争いに来たのではない。それをしまえ」

と軽々と紅葉の木から飛び降りた。打掛が闇色に一人の目の前に広がる。

地上に降りると、羽衣狐はじつと夜の傍らの匂を見つめた。

「それがお前の許婚者か？」

咄嗟に夜は匂を体で隠した。

「わうだ。それがどうかしたか？」

「お主、男色を好むのか？」

「違うー。これはじじいが女と勘違いして名前を贈つて」

その言葉に羽衣狐はにやりと笑つた。

「やはりな」

と赤い唇が艶やかに動いた。

「わらわは生まれた赤子が男と聞いて名を贈つた。ところが娶つてみれば、来たのは娘じゃ」

「？　どうこう」とだつ

と夜は闇色の女性に尋ねた。

「わらわ達が贈つた名を秀元が取り替えたのじや。わらわの妖力をこれ以上増やすぬ為にな。あの陰陽師、女同士では交われぬとわかつていてあこぎな真似をする」

だからと闇色の妖怪は匂をすつと指差した。

「それがわらわが名前を贈つた子供じや。わらわの許婚者
「ひめひつ」
てもりおつ」

返し

謎かけ

闇色の打掛けから一人の前に伸びた白い手に、昼と夜は互いに言葉もなく立っていた。

何？ なん……だつて？

昼は頭が割れるように打つのを感じた。

自分達は許婚者ではなかつた！

そのつきつけられた事実が、ひどく衝撃だった。

しかしほんの一拍で、立ち直つたのは意外にも夜の方であつた。

「断る！ こいつは俺が許婚者と認めた！ 男が一度娶つた相手を人違いでしたと簡単に渡せるか！」

と昼と羽衣狐の間に立ちふさがつた。

「ふむ」

と羽衣狐は腕を組み、夜と昼を見つめた。

「しかしお主まだ所有の烙印は押しておらぬのだろう？ 頬や唇には軽く触れたようだが、そやつの体からはお前の匂いがせぬ」

「所有の烙印？」

「そんなことも知らんのか。うぶな男など面倒なものじゃな」

「黙れ、この男嫌い！」

「自分の許婚者が行く先々や内緒でほかの妖怪に差し出されて交渉ごとに使われては嫌じやろう。だから名前を贈つた時に触れた相手の妖気が残るようにしてあるのだ。一度抱けば終生そやつの匂いは消えぬ。その妖怪以外には能力を発動できなくなる。まあ、許婚者の操を護るための処置じやな」

ぐつと夜は言葉につまつた。

つまり、俺達の間にまだ何もないこともお見通しといふわけか

……

「秀元め。一月あればお前が手を出し、わらわがじたんだ踏むしかないと思つたのだろうが、お前が存外へたれでよかつた」

「おい」

思わず夜は笑つて いる黒衣の女性に言つた。

「勿論ただ渡せとは言わん。お前の本来の許婚者を返そう

振り向き玄関にいた京妖怪に田配せすると、彼らの間から横の黒髪を両側で結わえた一人の娘が前に出された。

「苔ー」

娘は妖怪の中から走つて昼に飛びついた。

「リクオ、リクオー！ 会いたかった！ 会いたかったの！」

その姿を抱きしめ、昼ははつと田を開いていた。

何をしているんだ、僕は……苔のことを見れて！

あまりに楽しい日々だつたから、村のことを思い出す間もなく、一番大切な筈の彼女まで忘れていた。

ぎりりと昼は唇を噛んだ。

「そりが……お前が『狐毛』なんて頭を疑うような名前を贈つた張本人なんだな」

きつと昼は羽衣狐を見つめた。

「お前のせいでの苔がどれだけ苦労したと思っているんだ。苔がこけたーとか、おこげを食べた苔とか、頬がこけたとか散々からかわれてきたんだぞ」

「それ苔がこけた以外全部言つたのリクオ！」

と苔は怒りながら叫んだ。

「とにかく！ そんな悪趣味な妖怪のところに僕は行く気はないね

苔の言葉は聞き流してリクオは笑いながら言った。

「わらわが悪趣味とは……ひとえに高尚な好みは時に一般の理解を得にくいだけじゃ」

面白そうに羽衣狐は口答えした子供に笑つた。

「わらわとて普段の遊びなら、むさい男を相手にするよりまろやかな肌に柔らかな唇のおなごの方がよい。あんな筋肉と骨ばかりの生き物、抱いていて何が楽しい」

「お前は真正の変態か！？」

思わず夜は叫んでいた。

「夜、これは変態じゃない」

「じつと昼夜が笑つた。

「真正銘の変質者だよ」

「わあ！」

周りで見ていた妖怪達が思わず心の中で叫んだ。

「さすが昼夜……大妖怪相手でも堂々の変質者扱い……」

「みんなが言い出せないことを恐れもなく……」

と本家の妖怪達は唸つた。

しかし羽衣狐はきょとんとした顔をしていた。

「お前はおなごより男の方がいいのか？　そここの変人の孫はともかく、男としてそれはどうかと思つた」

「異性という考え方を基本から抜いているな。それこそどうだと思つぞ」

それに羽衣狐はくすくすと笑つた。

「気に入った！　お前は頭の回転も早いし度胸もいい。何よりもおなごのような顔立ちじや。胸の発育していないちょっととわらわを楽しませるものがついているだけのおなごと思えば愛嬌じや。成長しない呪いをかけて、情人として終生その姿でめでてやろう！」

「だからこいつは渡さねえ！」

と夜が再び一人の間に入つた。手には袴々切丸を抜いている。

「生憎取り替えればすむというもんじゃねえ。俺はこいつに決めた俺の許婚者はこいつ以外にありえねえ」

「ふむ、困ったのう」

にたりと羽衣狐が笑つた。

「やるか？　ぬらりひょんの孫」

空気が一瞬で闇色に変わるほどの妖気が溢れ出た。

冴え冴えとした銀色の刀を構える夜の後ろで、昼が「待つた！」

と叫んだ。

その声に一瞬強ばつていた周りの妖怪達も体の力を抜いた。

いくら若でも相手が悪い……

生死をかけた戦いになるのは日に見えていた。だから暁の言葉に救いを感じた。

暁は手を止めた二人にニヤリと笑った。

「要は僕がどけらの変質者に娶られるかでしょ？ それなら僕に決めさせてよ」

「ほう わらわが納得する方法があるといつのか？」

「古来から求婚者が重なつた場合は難問をとくつて決まつてゐるじゃない。だから 僕が一番欲しいもの、これを当てて僕にくれた方に僕をあげるよ」

「かぐや姫か」

羽衣狐は楽しげに笑つた。

「期限は明日から三日、一日にできる回答は三つまで。僕は当たつた方に でも一人とも当たらなかつたら僕を諦めて」

「面白い。それにのつた」

と狐は笑つた。

「夜もいいね？」

ぐこと袴々切丸を下げさせながらさく血に、

「 わかった」

と夜も仕方なく返した。

「では明日。勝負がつくまでこ手を出すなよ」

と言つて羽衣狐は帰つていった。

「出せば奴良組三代目はへたれと言つて触りじてやるわ

明らかに脅迫だった。

「」の場合はないのもへたれでは？

とみんな思つたが、確かに出すのも卑怯者扱いされるだらう。

とにかく、夜は血を振り返つた。

そこでは、再会に泣いている少女を優しく慰めていた血の穂やかな笑顔があつた。

「リクオ……リクオ。また会えてよかつた。怖かった、すごく怖かつたの」

「姫……」

そつと暁は抱きしめた。

「うか……」の少女が簪の……

ふと夜はなんとなくわかつてしまつた。暁の目が簪を見つめている時と回じようこ廻しげに細められていたからだ。

その途端、この少女に言い知れない黒い感情が湧き起しつた。

「暁」

後ろから夜は姫を見つめる暁に冷たく声をかけた。

「その娘 じばりく預かることになるのか?..」

と尋ねた。

「そうだね……本来君の許婚者だと言わればね……」

暁は困ったように答えた。

「わらわの許婚者……」

その言葉に姫は暁から顔をあげ、夜を見た。凜々しい顔立ちの美しい妖怪に、姫は僅かに頬を染めたが、ひどく冷ややかに見つめられてびくりと暁の陰に隠れた。

「大丈夫、変質者だけどとつて食いはしないよー」

「おい！俺を狐と同類扱いするな！」

笑う昼に夜は叫んだ。

「取り敢えず、苔は一つ目に預けたらどうかな？ 異類婚を嫌つて
いるから、苔に変な真似をしないだろ？ し、女子供には優しいんで
しょ？」

その夜に昼は提案した。

「人間を理解もしてもらえるしね」

「一つ目 そうだな」

そうしたら昼とこの少女を引きはなせる……

と夜は頷いた。

「じゃあ決まりだね」

笑いながら、昼は心の中で自分に唾を吐いていた。

何をしているんだ……僕は。

夜ならきっと彼女を大切に幸せにしてくれるだろ？ それなのに異
類婚に理解のない一つ目に預けようとしている。

彼の人間への理解を深める為？ そんなの表の言い訳だ。

きっと……彼なら話を夜に近づけない。それは『氣づかたくない』呟きだった。

その日奴良組は大騒動になった。

「若の許婚者が若の許婚者でなかつた！？」

「昼様は羽衣狐の！？」

「まづい！ それはあまりにまづいぞ！」

噂は本家中を駆け巡り、三十分後には本家の中で知らぬ者はいなくなつた。

「しかも昼様は羽衣狐を変質者呼ばわり！」

「それは天晴れ！ サスガ昼様！」

「みんな思えど口に出せなんだことを……よくぞ仰つた！」

「しかしその変質者に初恋の君を奪われるかもしれない若の心境を考えると……」

「男として泣けてきますなあ」

と本家の妖怪達はみんなして肩を落とした。

いやー、今じゃ一致団結して、若の衆に向かへますー。

そつ先ず雪女が立つた。

タゞ飯をよそおこながり、皿にせつぜなく歸る。

「わいこえは 頃様はどんなものが一番好きなんですか?」

「うふ? 食べ物?」

「はー! なんでもおっしゃってください。お作りしまやー。」

と満面の笑顔で笑つた。

「ついに作るのは何でもおこなつていいよー。でもたぶんひと食べで
いたいな」

「昼夜……私もずっとお作りしたいですー!」

行け! 訊け、そこだ!

本家のみんなが握り拳を作つた。

「じゃあお代わつもう一杯もうつてもいい? もう三杯田だけどお
いじつておこし婕ー!」

「はー! 雪んでー!」

すつと食べたいが違つだろ! うー?

全員が口に出さず口に突っ込んだ。

一番手は毛倡妓だつた。

「昼様が来られて一月、本家で記念に祝賀会を開きたいのですが、何か欲しい物とかあります？」

「欲しい物？」

「はい！ 記念に若から贈つてもらおうと思つてまして」

「そうだねえ」

と昼は考え込んだ。

「もつじき冬だから半纏！ あれ暖かいんだ！」

「昼様 もつと高いものでも大丈夫ですか？ 半纏は首無が手作りしてくれます」

「僕、毛倡妓からのが欲しいな。だつて毛倡妓つてすごい美人のお姉さんみたいだもの。お姉さんの手作りつて憧れていたんだ！」

「昼様……」

ぎゅっと毛倡妓は抱きしめた。

「私裁縫は得意ではありませんが、首無に教えてもうつて頑張ります！ だからお姉さんつて甘えていいんですよ」

「本当!…? す\"ぐ嬉しい!」

一番男慣れしている奴が説かれてどうする!?

と物陰の妖怪はみんなでつっこんだ。

一人首無はぶつぶつ言にながら、のの字を書いていたが、慰める者は誰もいなかつた。

本家妖怪達の腹の探り合いから解放されて、寝間に入つた畠を迎えた夜は少なからず驚いていたようだつた。

「お前　いいのか?」

「何が?」

と返す。

「俺はお前の許婚者じゃなかつたんだぞ。だからもう無理に同衾しないでもいい　側近達に言つて部屋を変えさせてもいいんだぞ」

「何を今更」

畠はすっぽりと布団に入った。

「この冷える夜に独り寝しろなんて殺生だ」

そう珍しく体を寄せてくる畠に夜は慌てた。

「だつてお前 烙印のこと聞いただろ。俺が無理矢理刻んだらどうする?」

「刻みたいの?」

と上田づかいで見上げた。

何も言わない夜の金の瞳が恐ろしいほど真剣だった。

刻んでもらおつか? そうすれば狐のものにはなりますむ……
優しい君は一度情をかわした僕の側で苔を並べて扱う」とはしない
だろう。

君は苔に触れることができなくなる……

だがそれはずっとずっと欲しかったものを諦めることになるかもし
れない。

僕は君の情人となり、一生そこから抜け出せないかもしねり。

情にあつい夜のことだ、抱いて終わりとはいかないだろうが、不動
の恋人の位置を『えらがんじがらめになるだろ』。

だつて君には理不尽な願いだから。

それでもその胸にすがりつくのを止められない。

「俺は無理強いはしないと約束した」

ああ……そうだね。

と昼は小さく笑った。

なんて真っ直ぐで優しい妖怪。

そんな君を嵌めてまで手に入れようとしている自分の望みの醜悪さと言つたら。

たまらず夜の胸に顔を埋めた。

それだけでいいんだ……そしたら後はもう何も求めないから。

体がズタズタになつても、自尊心を踏みにじられることが起きても、きっと堪えていけるから。

翌日羽衣狐は大きな荷物を部下に持たせ、奴良組の本家にやつてきた。

既に用意を調えていた妖怪達は、羽衣狐を襖を外して三間ぶち抜きの床の間に通した。その上座に昼が掛け軸を背に座り、その前にむかって右に羽衣狐と京妖怪が、左側に夜と総大将、若菜、そして側近達が座る。本家の妖怪はそれより後ろに詰めて、ことの成り行きを見守っていた。

「ふむ。どうやら約束通り手を出しておらぬよつじやな

と羽衣狐は母を見て言った。

「まあ一月何もできなんだへたのが今更愛でよつもわかるまいが」

「変質者が何をえらそつてー。」

と夜は叫んだ。

「わらわは変質者ではない。男などこおなじを愛でる高貴な趣味がわかるとは思つておらぬわ」

「いや、私にもわかりませんけどね……」

ぼそりと毛倡妓が呟いた。

「わかりたくありません」

さらりと若菜が言った。

「息子！ あんな変態に大事な妹の子を渡すんじゃありませんよ」

横から叱咤した若菜の見えない黒い圧力に、初めて夜は母と母との血縁関係を確認した。

「じゃあ、始めようか」

上座で昼が若菜の手作りの柔らかな紅葉色の着物を着て、にこりと笑んだ。

「僕が一番欲しいものわかった？」

それに羽衣狐は大きなつづみを持つてこじをせると、指で合図をして開かせた。

「人間が先ず欲するものといえば財産じやうりつ。大判小判はもちろんのこと、南海の真珠に珊瑚、翡翠に紫水晶、瑪瑙、舶来の硝子から京友禅までありとあらゆる財物を集めさせたぞ」

手下の京妖怪がつつみを開けると、それが山と積まれ、燦然と目に眩しい輝きを放っている。真珠は白真珠から金、桃色まで揃い、紫水晶に黄水晶、赤、黒様々な瑪瑙が夥しく積まれている。更に金と銀が光を放つて輝いていた。

思わず奴良組の妖怪達からおおつと感嘆の声があがつた。

関東一を誇る奴良組でも、これほどの財力はない。

しかしにこりと唇は笑つた。

「僕がその程度のものを自分で稼げないと考えてると思つ?」

「その程度! 言い切つた!

「ぐくりと本家妖怪が唾を飲んだ。

「僕の一生と引換だよ。安くみないでほしいなあ

「あれで安い……」

「昼夜の欲しいものつて一体……」

青田坊と雪女がじくりと呴いた。

「じゃあ夜は？」

と暁は尋ねた。

こいつが一番欲しいもの。

昨日からずっと必死で考えた。

何ももっていないこいつは何を一番欲しいのだろう？

そして考えた答えの一つを口にのせた。

「自分を一番愛してくれる人」

一瞬ぴくりと暁の指が動いた。

そして静かに睫が伏せられる。透き通る茶水晶の瞳が優しくかげ
る。

「それは とっても魅力的だなあ

でも不正解なんだと暁は淋しそうに笑った。

「じゃあ一回戻だね

と暁は羽衣狐の方を見つめた。

つつみを片付けさせた羽衣狐は片膝をたてて、面白そうに脣を見ていた。

「財でないとすると、地位や権力か？ わらわにかかればどんな権力者であろうと所詮駒じや。望むだけの地位をくれてやう。大臣でも関白でも將軍でも好きなのを選べ」

「ふうん。天皇は無理なの？」

「それが望みなら上皇を操つて、そなたを帝にしてやう。国を動かすも混乱に導くも思いのままじや」

「興味ないね、政治なんて」

「大人になれば変わるぞ？ 人間の権力に対する業は深い」

「今欲しいもの！ もう少し若者視点で考えてよ。あ、『老体には無理か』

「誰が老体じや！ わらわの姿はお前と数歳しか変わらぬ！」

「現実は千歳以上違うくせに 若作り」

「年より幼く見えるお前に言われたくないわ！」

「は、羽衣狐様……」

と後ろから鬼道丸が声をかけた。

はつと気がつき、じほんと居住まいを正す仕草はつり若さの女の
よだつた。

「うんうん、そうやって猫かぶつてればばれないって。でも狐が猫
かぶるなんて毛皮が小さすぎて無理だよねー」

怖い、昼様が怖すぎる……

大妖怪相手になんておそれ知らずな、とみんなが息をひそめて見て
いた。

「じゃあ夜は?」

と昼が振り返った。

「家」

と夜は昼を見つめた。

「暖かくてお前をいつでも休ませてくれる、住み心地のいい屋敷。
誰かに気兼ねして働くこともなく友達も呼んで遊べるようなお前だ
けの陽当たりのいい風通しが爽やかな家」

暫く昼は黙っていた。

「僕だけの家か……」

昼はそつと尋ね返した。

「もしそれが望みだつたら、君は僕だけの屋敷をくれるの?」

「おうー。」

と夜は答えた。

「夏は海が見えて、秋は紅葉が楽しめる場所に建てる。庭には桜を植えて春には花見ができる。俺と一緒に酒を飲もう。そして一人だけの時間をする」やつ

くすりと暁が笑った。

「それは お妾だよ、夜」

ひどく淋しい笑みだった。

「じゃあ今日の最後」

と暁が言った。

「ではそちらの女性の変質者さんから」

「その呼び方よせー。」

と思わず羽衣狐は叫んでいた。

「財物でも権力でもなく、年頃の男が求めるものといえば、美女であろう？ 幸いわらわは絶世の美貌、天下の美女と称される。そのわらわが男のそなたの恋人になつてやる」

長い艶やかな黒髪に手を滑らせながら羽衣狐は答えた。

「生憎と年増に興味はない」

「誰が年増じゃ！？ わらわは若く美しい！」

「若作りの老婆のくせに 図々しいにもほどがある」

「貴様わらわの年上の魅力がわからんのか！？ たかが千年ぐらいで老婆扱いするな！」

「僕から見れば充分ご隠居様、というかもう御先祖生きた化石のレベルだよ」

「誰が特別天然記念物だ！」

「なんで自分をそう良い方に言えるんだが。進化し損ねた絶滅危惧種が」

「わらわは一人、孤高の存在じゃから貴いのじゃ！」

「つうか絶滅してくれ。世の為人の為僕の為、三者にお得で世界に優しい」

「人を廃棄物みたいに言つな！ 年上は敬えいたわれ！」

「こりと唇は笑つた。

「そうだね。敬いたわる御老人だつたね」

「うわあ……」

ヒトリが思わずひしゃつてこる側で、若菜が膝を打つた。

「よく言ったー。やすがあの子の息子ー。」

どんな妹なんだつたんですー…?

みんなが声にならない疑問を叫んだ。

「とにかくそんな条件じゃ折角の美女も却下。単に僕が君のものになるだけじゃない」

と瞳はぱいと横をむいた。

「で、そちの男の変質者さんは答えは?」

「おーーー。頼むからあの女好きと同列にするな。なんか物悲しくなる」

「適度な悲觀は自分を見つめ直すいい機会だよ」

「いや 前向きに人生送りたいんだが……」

君ならそつかもねとくつと瞳は笑つた。

「確かに同性に恋をしたところでは否定できませんなあ……」

「でも本気の恋だからましなのでは? 相手は單なる遊び相手をで

すぞ」

「やー！ 本家妖怪どもー、『ヤシヤシ』を同意してるなー。」

夜が後ろにむかって叫んだ。

「まつたく……」

前をむく孫を見ながら総大将は呟いた。

「恋に否定はせんのじゃな？」

「『』の期に及んでそんな自覚もないよつでは私は我が子の鈍感ぶりに不安を覚えます」

と優しく若菜は微笑んだ。

前にむかって夜は座り直すと、じつと微かに笑みを刻んでいる唇を見つめた。そして口を開いた。

「親友」

ろくに何ももつていらない環境で手にした数少ないかけがえのない存在。失ったそれを取り戻したいと強く望んでも何も不思議はない。

「それは」

と唇はくすぐすと笑った。

「もう持っているよ。失ったなんて思っていない」

明るくて負けず嫌いな、でも悩みながら歩いている勇敢なゆう。この世で一番大切な若とゆうの一人の軽蔑を受けることになろうとも諦めきれない望み。

この妖怪達を利用してまで手に入れようと/orしている自分はなんと醜悪なのだろうと唇は笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7820y/>

椿の契約

2011年12月1日13時48分発行